

# 地方商工業者に関する一考察 ～明治期の博多における 呉服太物商を中心に～

合 力 理 可 夫

はじめに

1. 幕末から明治中期における呉服太物商の推移
2. 明治中期から後期における呉服太物商の推移
3. 商人の経営に関して
4. 営業税、所得税からみた呉服太物商
5. 呉服商人の企業者活動の一端について
6. 呉服商の役員就任状況

むすびにかえて

## はじめに

近年、企業勃興期における地方商工業者の役割についての研究が盛んに行われている。近代の福岡、博多商人に関する研究では、岡本幸雄氏や東定宣昌氏の会社設立や経営を通してみられる博多商人の企業活動の一端や、末永國紀、永江眞夫、加藤要一氏等による設立企業の役員分析を通しての研究、さらに主要設立企業の株主構成をも視野に入れた迎由理男氏の研究がある<sup>(1)</sup>。

これらの研究の見解として、末永は「藩政時代以来の人的つながりを基盤にして旧藩士族による企業設立が遂行されている点に、福岡県の一つの特色」がみられ、「諸都市の老舗商人の新しい起業機会への関心の薄さ」を指摘している<sup>(2)</sup>。

これに対し永江は「明治期の福岡市内の商工業者は、近代的企業の経営に広範かつ積極的に参加していたとは言い難い側面を有しながらも、地域の経

済的・社会的発展や地方－中央関係の変化に対応しつつ、近代的企業の経営に参加していたと言うことが出来よう」<sup>6)</sup>と指摘している。

迎は福岡に設立された企業を中心に博多商人の投資、出資状況を分析し、業種別にみればその差異はあるものの、「博多商人はかなり多岐にわたって投資、出資を行なって」おり、「彼らは単なる出資者ではなく企業家というべき人々であった。彼らは多くの場合発起人あるいは創立委員となり、企業設立のオルガナイザーとして機能し、設立後は取締役役に就任して、経営者として機能していた」<sup>4)</sup>と指摘し、さらに出資のあり方や経営に対する関わりかたから博多商人を3つのタイプに分けている<sup>5)</sup>。

以上のように、企業勃興期の福岡における商人の役割については様々な見解がみられる。本稿では福岡における商人の活動について、時系列的に商人の変遷を見るということを意識しながら考察したいと考えるが、すべての商工業者の跡を追うことは容易ではない。そこで、さしあたり明治期において福博の商工業者を代表する呉服太物商に焦点を絞ってみたいことにする<sup>6)</sup>。

## 1 幕末から明治中期における呉服太物商の推移

最初に1866（慶応2）年頃から明治中期において呉服を取り扱っている商人について見ておきたいが、それより以前は1747（延享4）年ころには福博には中牟田（岩田屋藤吉）、山際（紅屋久兵衛）、速見（遠江屋六右衛門）、平山（扇屋徳蔵）、磯貝（扇屋次兵衛）、古賀（紅屋宗七）、富永（富屋源右衛門）等が存在していたようである<sup>7)</sup>。

さて、1866年頃の福岡における呉服太物業者については『店運上帳』<sup>8)</sup>の資料で知ることができる。同資料は博多商人の職業構成や運上銀（「一種の営業税ともいうべきもの」<sup>9)</sup>）、冥加銀が記されており、当時の商人研究にとって貴重な資料である。但し、同資料は博多部のみで福岡部が含まれていない（表1参照）。

表1の運上銀は運上額と冥加銀の合計であるが、兼業の場合でも呉服の運上額に占める割合が高いこと、紙屋与助（渡辺与助）や松井五兵衛の運上額

表1 博多呉服商 (1866年)

氏名	屋号	住所	兼業	運上銀(匁)
五平	笠野屋	浜口町上		390
与助	紙屋	西町上	売薬、古手店	696(500)
磯貝徳右衛門		土居町下	博多織請元、売薬	223(185)
宗七	紅屋	行町		175
平次	久松屋	川口町		150
利作		新川端町上	甘木染地類問屋、代呂物店	※270(200)
井上次右衛門	肥後屋	掛町	紅絞り、唐物小売店	370(115)
松井五兵衛	江菟屋	掛町		400
次吉	肥後屋	掛町		※200
大山次平	茶屋	糺屋番		210
惣平衛	紙屋	橋口町	荒物店、塗店	94(10)
太三次	紅屋	川端町		50
彌平	万屋	洲崎町上		85
太七	己嶋屋	中嶋町		42
重兵衛	坐屋	中石堂町	小間物店	57(40)
久七郎	<sup>(袋カ)</sup> 谷屋	仲間町		200
久八	<sup>(袋カ)</sup> 谷屋	仲間町		40
野村万次郎		仲間町	唐反物店	※200(100)
又吉	袋屋	綱場町	小間物店、唐物店	180(70)
喜助	堺屋	綱場町		85
専次郎	木綿屋	綱場町		※200

備考：表中の( )は呉服の運上額を示し、※印は1870年の運上額を示している。

出典：「店運上帳」(1866年)宮本又次編『九州経済史論叢』第3巻、福岡商工会議所、1958年所収。

が極めて高く、200匁前後の運上額の商人が多いが、それらの商人は1870(明治3)年頃からの営業が比較的多いこと、また、呉服関係を取り扱う商人が掛町、仲間町、綱場町に集中していること等が分かる。

ところで、旧藩時代には「藩用に献金をなし公衆のため非常備に米金を出し或は橋梁を架設し貧民救済等の善行を称し与えられた」<sup>(10)</sup>町人格式があった。これは兩大賀、大賀並（年行司、御用達方）、大賀次、年行司次上々席、年行司次上、年行司次、年行司格、年行司格次という順に、いわば商人の格付けを設定したもので、種々の特権をもっていた。当初は商人の資産等がその評価となっていたわけではないが、御用聞町人は資産のある者数十名が選ばれて御銀御用を申し付けられており、その上に頭取としての御用聞方がおかれていることから<sup>(11)</sup>、「格式を持つ商人は資産の点からも有力商人であることは間違いない」<sup>(12)</sup>とされる。

今、1867（慶応三年）改の格式人名からみると（総数272名）、紙屋（渡辺）与助は大賀次（御用聞町人）、磯貝徳右衛門及び井上次右衛門は年行司次上、笠野屋（藤井）五平は年行司次、肥後屋次吉は年行司格次であり<sup>(13)</sup>、格式に占める呉服商人の人数は少ないものの、有力な呉服商の存在がみられる。しかし、運上額からみて、この時期の規模が大きいと考えられる業種は相物問屋、船問屋、蠟製造販売、鋳物鉄物業者たちであった<sup>(14)</sup>。

さて、1879（明治12）年12月3日、博多川端町の金山寺味噌屋金山店主八尋利兵衛（漬物屋兼呉服仲買業）の創案により、福博商店街振興策の一つとして呉服太物店を中心とする福博誓文晴の大安売が開始されるが<sup>(15)</sup>、同年11月の広告では27軒の呉服店が見いだされる（表2参照）。

『店運上帳』にみられた呉服商と比較すれば、人数的にはさほど大きな差異はないものの<sup>(17)</sup>、1866年に引き続いて見られる呉服商は茶屋次平、肥後屋次右衛門、袋屋又吉、笠野屋五（伍）平、紙屋与三郎（渡辺与助）の5名である（表2の○印）。また、相部藤右衛門は1866年では「太ト物商」となっており、繊維関係の営業をすでに行なっている。なお、『店運上帳』には福岡部が含まれていなかったが、大工町の岩田屋は1754（宝暦4）年に呉服商を始め、1876（明治9）年、七代藤兵衛が店舗拡張を行い、翌77年に博多麴屋町に支店を開設して初代久兵衛にその経営を任せており<sup>(18)</sup>、すでに前時代から呉服に携わっている。

表2 第1回福博誓文晴参加呉服店 (1879年)

氏名(店名)	屋号	住所	1866年との比較
藤兵衛	岩田屋	大工町	
卯兵衛	成巳屋	橋口町	
長次郎	香具屋	中島町	
松岡久兵衛		中島町	
紙小呉服店		麴屋町	
奥村呉服店		麴屋町	
岩田屋支店		麴屋町	
次平	茶屋	麴屋町	○
石井新作		掛町	
次右衛門	肥後屋	掛町	○
相部藤右衛門		掛町	
次平	扇屋	掛町	
幸七	吉野屋	行町	
善助	紙屋	行町	
葉山卯三郎		土居町	
忠次郎	袋屋	網場町	
袋屋支店		網場町	
又吉	袋屋	網場町	○
久吉	斧屋	中間町	
久一郎	斧屋	中間町	
秋枝正四郎		中間町	
勘右衛門	久留米屋	中間町	
伍平	笠野屋	中石堂	○
与三郎	紙屋	上西町	
紙与本店		上西町	○
奥村次八		上西町	
忠平	茶屋	古小路町	

備考：表中の○印は『店運上帳』で見られた商人を示す。

出典：橋詰武生『渡邊與八郎伝』渡邊與八郎伝刊行会、1976年、33～34ページ<sup>(16)</sup>。

当時の商人の家系が明らかでないので推測の域をでないが、『店運上帳』には野村家、具島家、奥村家や小川家（紙小）及び表2にみられる呉服商の一族と思われる名前を見出すことができ、これらの一族はかなり有力な家系と考えられる。

表1、表2の商人のうち吉野屋幸七は河内幸七、成巳屋卯兵衛は中尾卯兵衛、久留米屋勘右衛門は具島勘右衛門、笠野屋五平は藤井五平、袋屋又吉は吉田又吉、岩田屋藤兵衛は中牟田藤兵衛、斧屋は野村久吉、野村久一郎であり、渡辺家も含めいずれも前時代から伝統をもつ一族である。

1885（明治18）年に発行された『筑紫国名所豪商案内記』<sup>(19)</sup>にも渡辺与三郎、吉田又吉（本店・綱場町、支店・綱場町）、藤井五兵衛（中石堂町）などの名前が見られ、一応これらの商人は幕末・維新の動乱を切り抜け、有力な呉服太物商としてその存在を示しつつあったと言えるであろう。

さて、この頃の商工業者の富裕度を示した資料で1887（明治20）年に発行された『福岡県内豪家一覧表』<sup>(20)</sup>がある。同資料は1枚の用紙（102cm×82cm）に「明治廿年度決額」として左右対称に1,274名の人員が記載されており、富裕度は「動産・不動産合併価格凡」で表され15のランク付けがなされている。同資料を利用したものはあまり見当たらないが、当時の商工業者の存在を確認するという点では問題はなく、また、大凡の概観を見るということを取り上げておきたい<sup>(21)</sup>。

表3によれば、呉服太物商の資産が大きくなってきており、また、中でも渡辺与三郎を始めとし、樋口吉次、中尾卯兵衛、奥村利助等、かなりの資産を持つ呉服商が確認出来よう。

## 2 明治中期から後期における呉服太物商の推移

次に、明治中期から後期にかけての呉服太物商の変遷について見ておこう。

最初に1892（明治25）年の状況を『日本全国商工人名録』でみておく（表4参照）。

表4からみると、基本的にはこれまでにみられた呉服商人と変わりなくほ

表3 福岡県内豪家一覧 (1887年)

動産・不動産合計 (円)	職 業	動産・不動産合計 (円)	職 業
37,000～200,000		37,500～250,000	
野 村 久 下澤善右衛門 磯野七平 堺 宗 一 郎 古 川 嘉 平 樋 口 吉 次 中 尾 伊 作 中 尾 卯 兵 衛 加 野 熊 次 郎	小間物卸商 鋳物、諸機械製造 砂糖商 魚類問屋 呉服太物商 清酒醸造 呉服太物商 清酒醸造	野 村 久 次 渡 辺 与 三 郎 太 田 清 蔵 許 斐 儀 平	古着商 呉服太物商 蠟油類商 清酒醸造
24,500～35,000		25,000～36,000	
柴 田 忠 次 石 橋 源 次 郎 瀬 戸 惣 太 郎 河 原 田 平 助 児 島 善 三 郎 斉 藤 善 助	蠟油類商 清酒醸造 流通二係ル作業 文房具卸商 呉服太物商 蠟油類商	渡 辺 治 平 奥 村 利 助 奥 村 源 吉 石 蔵 利 吉 幸 田 次 平 深 見 平 次 郎 奥 村 利 平	生糸商 呉服太物商    鋳物商 醤油商
17,500～24,000		18,000～24,300	
原 三 信 野村久右衛門	医師 古着商	内 田 治 平	乾物商
15,000～16,700		15,000～17,000	
太 田 嘉 蔵 徳 永 専 蔵 渡 辺 籐 吉 井上卯右衛門 藤 井 五 平	蠟油類商 薬種商 万金物商  呉服太物商	石 橋 源 六 小 川 小 七 奥 村 利 吉 奥 村 次 七 吉 田 又 吉 下 澤 善 平 深 沢 伊 三 郎	酒造業 呉服太物商 醤油醸造 呉服太物商 呉服太物商 洋服裁縫店 砂糖卸商
12,600～14,950		12,700～14,950	
		村 上 義 太 郎	灯台建築
10,300～12,500		10,500～12,500	

表 3

動産・不動産合計 (円)	職 業	動産・不動産合計 (円)	職 業
9,400~10,050		9,600~10,140	
松村半次郎 栗原伊平 野村甚蔵 河内卯兵衛 平賀惣次郎 波多江嘉平	紙商  紡績綿糸商 洋器具骨董商 薬種商	遠藤甚蔵 渡辺勘次郎 樋口伊三郎 佐藤久七 野村久吉 井上卯七 古井新右衛門 河内幸七 小川六三郎 山際孫七	質商 醤油醸造 醤油醸造 紙商 呉服太物商 米穀商  洋服商  清酒醸造
8,400~9,370		8,500~9,370	
7,700~8,200		7,750~8,300	
松永専次郎 大山篤三郎 半田次吉 小島善次郎 太田与三郎 石蔵卯之吉 具島勘右衛門 井上久右衛門 伊藤長兵衛	萬小間物商 清酒醸造 荒物商 呉服太物商 醤油醸造、砂糖商 博多米商会所仲買 呉服太物商 蠟油類商 呉服太物商	箕原宗七 野村久七郎 長野嘉平 石村卯三郎 奥村次平 田島太平 石蔵利八 奥村次吉 福本嘉平	荒物商 呉服太物商 古着商 綿糸紡績商 荒物商 塩問屋業 醤油醸造 醤油醸造 呉服太物商
7,000~7,650		7,000~7,650	
飯野貞平 太田嘉兵衛	陶磁器卸商 除風散、酒類売捌所		
6,100~6,900		6,150~6,900	
5,650~6,090		5,700~6,100	
		紫藤儀平	魚類依託問屋
5,350~5,600		5,350~5,600	
5,010~5,300		5,020~5,300	
梅崎源吉 樗木権右衛門	米穀商 洋服商	井上友次郎	絵具染料商



表 3

動産・不動産合計 (円)	職 業	動産・不動産合計 (円)	職 業
5,000		5,000	
中 埜 和 四 郎 川 野 金 右 衛 門 有 吉 巳 三 郎 佐 伯 武 平 松 下 栄 次 郎 井 上 与 助 社 家 間 善 次 郎 門 司 軌 秋 枝 正 四 郎	荒物商  醤油醸造 清酒醸造 万金物商 呉服太物商 米穀商 荒物商 呉服太物商	岩 隈 久 兵 衛 八 尋 伊 三 郎 渡 辺 五 平 五 十 嵐 円 助 淵 上 栄 蔵 大 須 賀 喜 平 立 石 善 平 大 原 嘉 蔵 野 村 久 作	諸仲買問屋 諸荒物商、紙商 蠟油類商 万金物商 蠟油類商 万問屋 乾物商 材木商

出典：安永要蔵・井ノ口金太郎編輯兼発行『福岡県内豪家一覧表』1887年（福岡県立図書館蔵）、職業は白崎五郎七、白崎敬之助編『日本全国商工人名録』（1892年）〔国立国会図書館蔵〕、鈴木喜八、関伊太郎『日本全国商工人名録・第2版』、1898年（渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧』日本図書センター、1999年所収）；岡部啓五郎『九州鉄道旅客便覧』、1893年；「電話番号簿」（1906年）『渡辺文書』（福岡市総合図書館蔵）等による。

ほその姿がみられる。また、石蔵利平、奥村利助、小川小七（紙小）、中尾卯兵衛、吉田又吉のように支店（個人での呉服の支店、又は兼業としての支店）を設置しているもの、中牟田家、野村家、吉田家のように一族で呉服を営んでいる者が多く、複数の店を開設している。

1893（明治26）年に発行された『九州鉄道旅客便覧』<sup>(22)</sup>には各町ごとに主要な商店及びその職業が記載されている。そこで、当時の商人の出店状況の一端を見るという意味で、同書により呉服太物商及びその一族と思われる商人の出店状況を掲げておく<sup>(23)</sup>。

表5から、石蔵利平のように種々の営業を別々の町で行う場合、小川小七や吉田又吉のように同一町内で様々な営業を行う場合、中尾卯兵衛のように呉服を他の町にかけて営業を行う場合、野村家のように限られた職種を中心に同一町内で行う場合、渡辺家のように一族が同一町内で様々な営業を行う場合など、実に多様な経営の展開がみられる<sup>(24)</sup>。後に醤油造を考えた渡辺与

表4 福岡市呉服太物商 (1892年)

氏名	住所	備考
秋枝正四郎	博多仲間町	
石蔵利平	〃	支店
伊藤長兵衛	博多掛町	江州支店
小川小七	博多麴屋町	第六商店
小川小七	〃	第三商店
奥村利助	博多麴屋町	支店
川野金平	本町	
具島勘右衛門	博多上市小路	
児島長次郎	博多下土居町	
中尾卯兵衛	橋口町	
中尾卯兵衛	博多掛町	支店
中牟田藤兵衛	大工町	
中牟田喜兵衛	博多麴屋町	
野村久吉	〃	
野村久一郎	博多仲間町	
藤井五平	上濱日町	
古井新左衛門	博多下土居町	
三苫朝次郎	〃	
吉田忠次郎	〃	
吉田又吉	博多網場町	支店
渡辺与三郎	博多上西町	

出典：白崎五郎七、白崎敬之助編、前掲書。

三郎は数カ所の土蔵創りや専門職人を雇ったが<sup>25)</sup>、新規に営業の幅を拡げる場合にはそれなりのコストがかかるのは当然で、そのためにはかなりの蓄積を必要としたであろう。

また、麴屋町の小川家や仲間町の野村家のように、町にしめる勢力が大きいのと思われるケースも見られる。

表 5 博多呉服太物業者の出店状況 (1893年)

氏 名	職 業	住 所	備 考
秋 枝 正 四 郎	呉服反物卸商	仲間町	足袋類
石 蔵 利 八	清酒醸造商	大濱町	
石 蔵 利 平	呉服反物商	掛町	支店
石 蔵 利 平	魚類問屋	下対馬小路	出張店
石 蔵 利 平	清酒醸造商	鯛町	
伊 藤 長 兵 衛	呉服反物卸商	掛町	江州支店
小 川 小 七	呉服反物商	麴屋町	第六支店
小 川 小 七	和小間物商	麴屋町	第一支店
小 川 小 七	洋小間物卸商	麴屋町	第二支店
小 川 小 七	諸金物卸商	麴屋町	第五支店
小 川 小 七	呉服和洋反物卸商	麴屋町	第三支店
小 川 小 七	文房具卸商	麴屋町	第四支店
奥 村 治 吉	醤油醸造	中石堂	
奥 村 治 兵 衛	万荒物紙商	中石堂	
奥 村 治 七	醤油醸造	上西町	
奥 村 利 吉	清酒醸造	上名島町	
奥 村 利 助	呉服反物卸商	麴屋町	
奥 村 利 助	和洋紡績糸金巾卸商	麴屋町	本店
奥 村 利 助	醤油醸造	中島町	支店
奥 村 利 平	醤油醸造	上洲崎町	
具 島 勘 右 衛 門	呉服反物商	上市小路	
児 島 善 三 郎	和洋絵具染料各国紙並漆商	中島町	
児 島 善 次 郎	羊毛織物雜貨商	中島町	
児 島 長 治 郎	呉服反物商	下土居町	
篠 原 由 治 郎	呉服和洋反物商	網場町	
中 尾 伊 作	清酒醸造商	橋口町	
中 尾 卯 兵 衛	呉服反物商	掛町	支店
中 尾 卯 兵 衛	呉服反物卸商	橋口町	

表 5

氏 名	職 業	住 所	備 考
長 野 嘉 兵 衛	古着商	下東町	
中 牟 田 喜 兵 衛	呉服反物卸商	麴屋町	
野 村 久 一 郎	古着商	仲間町	
野 村 久 吉	呉服反物商	仲間町	
野 村 久 左 衛 門	古着商	仲間町	
野 村 久 七 郎	呉服反物卸商	仲間町	
野 村 久 蔵	古着商	仲間町	
藤 井 五 平	呉服反物卸商	上濱口町	
古 井 新 左 衛 門	呉服反物商	下土居町	
三 苫 朝 次 郎	呉服反物商	網場町	
三 苫 啓 治 郎	各国売薬大取次所	新川端町	
吉 田 又 吉	呉服反物卸商	網場町	支店（本店も網場町）
吉 田 又 吉	和小間物卸商	網場町	支店
渡 辺 治 平	生糸商	上西町	練糸類兼履物漆器卸
渡 辺 綱 三 郎	和洋紡績糸商	上西町	煙草製造所
渡 辺 藤 吉	万金物商	上西町	諸機械製造鍋釜鑄造 （下厨子支店）
渡 辺 与 三 郎	呉服反物卸商	上西町	監獄製木綿倉敷紡績糸売捌

出典：岡部啓五郎、前掲書。

ところで、呉服販売では越後屋（現三越）の「呉服物現銀安売無掛値」の販売方法を始めとし、定価販売が実施されつつあったが、それでも、「正札ヲ利用シテ自己ノ利益ヲ図ラン為往々不正ノ正札ヲ付シ内引等ヲナシ販売スル店」<sup>(26)</sup>もあった。この是正のため、福博呉服商の中には1896（明治29）年頃に「十五名ノ団結ヲ図リ『正商組』ト号ケ正直確實ナル正札ヲ以テ販売」<sup>(27)</sup>することを決し、以下の12名の組合員が団結した。

福本商店（川端町）、吉田本店（網場町）、古井商店（掛町）、岩田屋商店（麴屋町）、肥後屋商店（掛町）、具島商店（仲間町）、野村本店（仲間町）、

丸三商店（綱場町）、野村商店（仲間町）、笠野屋商店（石堂町）、中尾支店（橋口町）、石蔵屋商店（掛町）

これらの背景には各店が行う値引き販売への対抗策や旧来の呉服商売の改革という意味合いがあるかもしれないが、「正商組」に加入している呉服商が老舗で有力商人あることを考えれば、信用問題という側面も否定出来ないであろう。

なお、1895（明治28）年時点での福博呉服商組合員は渡辺与三郎、具島勘右衛門、野村久七郎・同支店、野村久吉、秋枝正四郎、吉田又吉・同支店、元満友助、武内佐兵衛、三苦朝次郎、篠原由次郎・同支店、石村支店、八谷誠助、古井保太郎、北川源三郎、伊藤長兵衛、石蔵万吉、井上治右衛門、井上梅次郎、中尾支店、宮崎籐七、白水五三郎、岩田屋喜兵衛、奥村利助、小川第三商店、榑崎精七、山際徳次郎、福本嘉平、宮内延平、川野金平、上田伝治等である<sup>(28)</sup>。

さて、福博においては博多競商会を毎年開催している。これは、同業者を中心に互いに商品を出品し取引をするものであるが、1895年に27回にわたって開催された呉服競商会では58名の商人が参加し取引が行なわれた。表6は同年における呉服競商会の売買高を示したものである。

ここではすべての商人が27回にわたって開催された競商会に参加したかどうかは確認できないが、これまでにみられた有力商人は売買高も上位にある。

ところで、呉服の仕入は大坂、京都が中心であったが、当時の流行を探ることは大切な仕事であった。例えば藤井五平は「商業観察旁々仕入の為め京都大坂を経て関東地方を遊歴し大ひに風流の新柄を探り…珍奇な品々着荷仕候依て今後更に一大改良を為し大奮発にて先第一は品柄を清々吟味致し極々安値の正札を以て販売仕候」とPRしているが、岩田屋においても「流行ノ珍物種々着荷」、丸三商店でも「弊社支配人京阪地に於て流行の珍柄格安の物品仕入れ<sup>(29)</sup>」と、呉服販売では「流行」、「格安」が合言葉のようになっていた。

次に、1898（明治31）年の呉服商を『日本全国商工人名録』よりみておく

表6 呉服競商会売買高 (1895年)

(単位:円)

氏名(店名)	売買高	氏名(店名)	売買高
篠原由次郎	3,997	具島勘右衛門	1,109
中尾卯兵衛	3,761	百田源七	1,066
野村久七郎	3,354	元満友助	1,026
井上梅次郎	3,198	平畑喜平	1,001
渡辺与三郎	2,952	藤野鶴吉	855
武 <sup>(内)</sup> □佐兵衛	2,747	磯貝次吉	771
吉田又吉	2,649	帆足又次郎	764
秋枝正四郎	2,591	古井保太郎	759
八谷誠助	2,590	添田仁三郎	640
小川小七	2,291	中牟田久兵衛	580
井上与助	2,203	落石久吉	558
川野勝次	1,971	白土正助	500
吉田支店	1,923	西辺嘉七	479
眞鍋利助	1,648	奥村利助	475
吉井和吉	1,627	野村久次郎	432
伊藤長兵衛	1,583	右田源吉	429
上田傳八	1,508	渡辺伊助	391
塚本支店	1□78	中牟田喜兵衛	388
高木久平	1,467	三笠留吉	362
中村久兵衛	1,331	吉田忠次郎	340
原惣兵衛	1,278	植崎精七	305
宮崎藤吉	1,276	他300円以下16名	

出典:『福岡日日』1896年1月5日。

(表7参照)。

1892年と比較して、新たに氏名が見られる者は17名、同一人物名は13名、同姓の者(一族かあるいは改名かは判断できない)3名である。ただし、17

表7 福岡市呉服太物商 (1898年)

氏名	住所	1892年との比較
秋枝正四郎	博多中間町	○
石蔵万吉	博多下西町	△
石村徳次郎	博多網場町	
伊藤長兵衛	博多掛町	○
井上与助	博多下西町	※古着商
魚住源次郎	博多網場町	
小川小三次	博多糶屋町	△
奥村利助	博多糶屋町	○
川野金平	福岡本町	○
具島勘右衛門	博多上市小路	○
幸田次平	博多中島町	
佐野篤次郎	博多橋口町	
篠原由次郎	博多町	
竹内佐兵衛	博多上濱口町	
中尾卯兵衛	福岡橋口町	○
中牟田喜兵衛	博多糶屋町	○
中牟田藤兵衛	福岡大工町	○
榑崎清七	博多上洲崎町	
野村甚助	博多中間町	△
波多江弥七	福岡荒戸町	
八谷あい	博多掛町	
樋口吉次	福岡薬院町	
福本嘉平	博多下新川端町	
藤井五平	博多上濱口町	○
松村半右衛門	福岡紺屋町	
三苦朝次郎	博多網場町	○
宮内延平	福岡下名島町	
宮崎藤七	博多掛町	

表7

氏名	住所	1892年との比較
百田源七	博多行町	
吉井保太郎	博多下土居町	
吉田忠次郎	博多網場町々	○
吉田又吉	博多網場町	○
渡辺与三郎	博多上西町	○
渡辺与三郎支店	博多行町	

備考：表中の○は1892年に見られる商人、△は同姓であるが名前の異なる者、※は当該年度に他の職業欄で記載されている職業を示す。

出典：鈴木喜八、関伊太郎編、前掲書。

名の内、井上与助は1892年では職業が「古着商」となっている。また、1892年の登場人物で、1898年に名前が見られない商人は児島長次郎、古井新左衛門の2名である。

さて、この頃の呉服太物商の所得は表8のごとくである。

同じ時期の所得高の順位は、鉱業の平岡浩太郎が60,000円と抜出ており、続いて古着商の野村久次が25,000円、醸造業の山本豊吉が9,800円という順位で、呉服のトップである吉田又吉は上位6位に位置する<sup>(30)</sup>。

同表から吉田、中牟田、奥村等が目立つが、後年、中牟田は(株)岩田屋百貨店を創設し、その岩田屋百貨店と奥村雑貨店とが合併し奥村利助（1919年、先代利助の二男である利一が襲名し、翌年奥村商事株式会社を創立）は岩田屋の取締役となる<sup>(31)</sup>。また、吉田又吉は渡辺家の親族となり<sup>(32)</sup>、明治後期には多数の企業の役員に就任する等、不思議な縁が見られる。彼らだけでなく、他にもこのような関わり方をもつ商工業者がいるかもしれないが、この点は検討の余地が残されよう。

次に1907（明治40）年の状況を見ておく（表9参照）。

先の1898年の『商工人名録』と比較すれば人数的に差異はないが、同じ顔ぶれは16名であり、これらのうちの8名の商人は1892年にも名前がみられる。



表 8 呉服太物商の所得額 (1900年11月調)

氏 名	所得額(円)	氏 名	所得額(円)
吉 田 又 吉	6,300	渡 辺 与 一	1,200
中 牟 田 喜 兵 衛	4,500	魚 住 源 次 郎	1,100
奥 村 利 助	4,100	三 苫 朝 次 郎	1,100
中 尾 卯 兵 衛	3,000	渡 辺 与 三 郎	1,100
宮 内 延 平	2,400	篠 原 由 次 郎	960
児 島 善 次 郎	2,200	具 島 勘 右 衛 門	920
小 川 小 七	2,100	松 村 半 右 衛 門	860
石 蔵 利 助	1,900	檜 崎 精 七	850
藤 井 五 平	1,800	井 上 与 助	800
福 本 嘉 平	1,700	樋 口 吉 次	650
川 野 金 平	1,600	佐 野 篤 次 郎	600
中 牟 田 籐 兵 衛	1,300	波 多 江 弥 七	540
百 田 源 七	1,200	八 谷 ア イ	500
川 原 田 梅 次 郎	440	武 藤 ナ ナ	300

出典：土方新太郎『福岡県一円富豪家一覧表』福岡県名誉発起所、1901年。

表 9 福博呉服太物商 (1907年)

氏 名(店名)	住 所	屋 号(店名)	1898年との比較	1892年との比較
伊 佐 善 三 郎	西新町	油屋		
伊 藤 長 兵 衛	行町	伊藤商店	○	○
魚 住 源 次 郎	綱場町	魚住商店	○	
大 場 常 吉	石堂町	笠野屋		
大 曲 鹿 次 郎	川端町	大豊		
岡 崎 元 助	綱場町	大島屋		
奥 村 利 助	麴屋町		○	○
川 野 金 平	本町	川野屋	○	○
川 原 田 梅 次 郎	上市小路			
木 梨 久 太 郎	下西町	袋屋別家		
幸 田 次 七	中島町	幸田商店	△	

表 9

氏名(店名)	住所	屋号(店名)	1898年との比較	1892年との比較
児島善次郎	中島町	香具屋	※小間物洋物商	※洋物商
小林島太郎	麴屋町新道	油屋		
佐野篤次郎	橋口町	佐野屋	○	
篠原亀次郎	下土居町	篠原支店		
篠原由次郎	掛町	丸十呉服店	○	
戸次源次郎	箱崎町			
中尾卯兵衛	橋口町		○	○
中牟田喜兵衛	麴屋町	岩田屋呉服店	○	○
中牟田藤兵衛	大工町	岩田屋	○	○
榎崎精七	上洲崎町	丸二本店	○	
西原与八	西新町	泉屋		
野村久七郎	中間町	斧屋	△	
福本嘉平	下新川端町		○	
藤井伍兵衛	網場町	笠野屋	○	
松村半右衛門	紺屋町	橘屋	○	
三苫寛一郎	麴屋町	丸三呉服店	△	
宮内いき	下名島町		△	
武藤なを	橋口町			
門司儀壮	下祇園町			※荒物商
百田あさ	片町			
百田商店	行町掛筋		○	
吉田忠三郎	網場町	袋屋	△	△
吉田又吉	網場町	袋屋呉服店	○	○
渡辺与三郎	上西町	紙与本店	○	○
渡辺与三郎	行町	紙与支店	○	○

備考：表7と同じ。なお、原資料には「川原田梅次郎」と「河原田梅次郎」の2名の氏名が見られる。「川」と「河」の違いはあるものの、住所、営業税、所得税ともに同一であり、二重に記載されていると思われる、ここでは「川原田梅次郎」のみをあげておく。

出典：山崎克巳編『日本全国商工人名録』（第3版、下）商工社、1908年。

同姓の者は5名であるが、一応彼らを一族（或いは改名も考えられるが）と見なせば14名が新しく確認できる呉服太物商であるが、表中に見られるように児島善次郎は「小間物洋物商」、門司儀社は「荒物商」となっていたので、12名の呉服商が新しく確認出来ると言えるであろう（篠原亀次郎は由次郎の同族であり、百田あさを一族とみなせば、実質10名）。

また、児島善三郎、秋枝正四郎、小川小三次、具島勘右衛門等が見当たらないが、具島勘右衛門は「木綿太物商」として記載されている。

次に博多商工会議所編の『福博商工人名録』で1910（明治43）年の呉服太物商を確認しておく（表10参照）。

1907年と比較すると、人数は56名と多くなっているが、『日本全国商工人名録』（1907年）では商工業者の収録基準が原則として営業税30円以上としていることと、両資料の職業区分の違いにより<sup>(33)</sup>収録人数の差がでているのであろう。

1907年との比較では、28名が同じ顔ぶれであり、同姓3名をそれぞれの一族等とみなせば25名が新しく確認出来るが、これも表中に示しているように1907年には7名が他の職業欄に記載されているので、新しく確認できるのは実質18名である。

氏名が見られない呉服商のうち、有力な呉服商であった中尾卯兵衛が見当たらない。

以上から、呉服太物業者では明治期を通して伊藤長兵衛、奥村利助、具島勘右衛門、中牟田喜兵衛、中牟田藤兵衛、野村久三郎、篠原由次郎、藤井伍（五）平、松村半右衛門、吉田又吉、渡辺与三郎など、前時代からの有力な呉服商人が衰退することなく経営を行っていたことが分かる。

また、全体としても呉服商人の劇的な交代といった状況は見られないが、その資産や営業規模はかなり差が開きつつあったと思われる。この点については後述する。

表10 福岡市呉服太物商 (1910年)

氏 名	住 所	1907年との比較	1898年との比較
青木慶太郎	上市小路		
秋穂荒太郎	仲間町		
飯野熊吉	行 町		
伊佐善三郎	西新町	○	
石田ハル	橋口町		
伊藤長兵衛	行 町	○	○
魚住源次郎	綱場町	○	○
江藤保太郎	芥屋町		
大場常吉	下呉服町	○	
大場仁一郎	上市小路町	※木綿太物商	
大曲鹿次郎	川端町	○	
大山忠平	中石堂町	※木綿太物商	
岡崎元吉	蔵本町	△	
岡田専助	東中州町	※木綿太物商	
小川小一郎	麴屋町		△
奥村利助	麴屋町	○	○
川野金平	本 町	○	○
川原田善兵衛	上市路町		
川村庄次	西 町		
木梨久太郎	蔵本町	○	
具島勘右衛門	上市小路町	※木綿太物商	○
幸田辰次郎	中島町	△	△
児島善次郎	中島町	○	※小問物洋物商
小林島太郎	麴屋町	○	
榊清蔵	綱場町	※木綿太物商	
佐野篤次郎	橋口町	○	○
篠原亀次郎	下土居町	○	
篠原由次郎	掛 町	○	○

表10

氏名	住所	1907年との比較	1898年との比較
柴田 弥一郎	紺屋町		
城後 六蔵	下新川端町		
白土 源太郎	下東町		
白水 五三郎	下小出町		
白水 米次郎	下新川端町		
田中 佐太郎	下東町	※木綿太物商 (久留米緋及縞商)	
中牟田 藤兵衛	大工町	○	○
中牟田 喜兵衛	麴屋町	○	○
植崎 精七	上洲崎	○	○
植崎 昇次郎	下呉服町		
西原 与八	西新町	○	
野村 久七郎	仲間町	○	△
平井 友太郎	西町		
福本 嘉平	下新川端町	○	○
藤井 伍兵衛	綱場町	○	○
松村 半右衛門	紺屋町	○	○
溝口 作平	上新川端町		
三苫 寛一郎	麴屋町	○	△
宮内 イキ	下名島町	○	△
武藤 ナオ	橋口町	○	
門司 儀壮	下祇園町	○	※荒物商
百田 増蔵	行町	△	△
安武 乙吉	橋口町		
山際 徳次郎	川端町	※木綿太物商 (久留米緋商)	※木綿太物商 (久留米緋商)
吉田 卯作	綱場町		
吉田 忠三郎	綱場町	○	△

表10

氏名	住所	1907年との比較	1898年との比較
吉田又吉	綱場町	○	○
渡辺与三郎	上西町	○	○

備考：表7と同じ。

出典：『福博商工人名録』（1910年）、博多商業会議所（『渡辺文書』）。

### 3 商人の経営に関して

先述のように、これらの商人の営業は個人で異なる複数の業種を取り扱う場合、一族で主として関連の業種を扱う場合、一族で異なる業種を扱う場合等がみられたが、ここで、彼らの営業の一端について、渡辺家と綿糸問屋である河内家のケースで見ておこう<sup>(34)</sup>。

初代与助から呉服太物を譲り受けた2代目与助（与三郎、のち与一）は先述のように醤油造の営業も考えたようであるが、これを1882（明治15）年1月に勘次郎（長女琴の婿養子）に譲り渡した<sup>(35)</sup>。勘次郎は養父与三郎に「讓受証」を提出しているが、「醤油商営業子孫迄相守決而商業替等仕間敷候唯御傳被下候商業而已一心二相守…」<sup>(36)</sup>ことを誓っている。すなわち、渡辺家では同族が拡大されていくので、その営業の重複を避けるためであろうが、本家が分家や別家の営業を決定し、それ以外の営業を禁止している。この点、河内家でも同様に1906（明治39年）には「伊三郎を分家」し、「伊三郎の業体を西洋雜貨商と定め昨日より開業す。此日披露式を催はし親族其他を招待す」<sup>(37)</sup>と、分家の職業は本家が決定している。

渡辺家では2代目与助が明治35年に「家名永続之為規則」を制定し、金銭貸借や物品の借入、保証人、約束手形の振出、米穀・株式等の定期取引、諸事業への関与等を禁止した<sup>(38)</sup>。これは渡辺家の企業活動を制約することになるが、何よりも「家」存続のための確実性を追求したものであろう。

繊維関係ではないが、磯野家（鑄鉄業）の『家憲』でも「祖先の遺業を継紹し進取守成其の宜しきを失はざらんことを努め投機射利に事業は一切之を

避くへし」と堅実性を求め、家業以外の事業を行うことを禁じているが、家長が「嗣子青年に達し家政を管理するに足る時期に至るまで」<sup>(39)</sup>という点で渡辺家と異なる。

ところで、明治中期から後期にかけての商人の経営状況はどのようなものであったのであろうか。河内卯兵衛が残している『日記』には断片的ながら当時の事情が記されている<sup>(40)</sup>。

「各地金融界混乱し特に京都最も搔擾す。当地又個人の閉店するもの続出す」〔1901（明治34）年5月8日〕。

「渡辺伊助氏と共に百田救済の爲めに十七銀行博多出張所に至り同人当座借越二千円迄の保証に立つ…百田に対し直接の貸金其他にて我れの引っかゝりとなりたるものは思はぬ多額に上りたり」（1901年3月29日）。

「去月以来連日の如く協議を重ね奔走に勉めたる百田救済の話愈々結了に近づき此日家憲店則等を制定し渡辺与三郎、渡辺伊助、平畑勝三の諸氏と百田宅に会し懇談会を催はす」（1901年5月7日）

百田とは恐らく呉服商の百田家と思われるが、この内容は当時の商人間の関係を示す一例であろう<sup>(41)</sup>。ここでは「家憲店則等を制定」という行為まで立ち入っているが、このようなケースが、例えば筑豊における大手石炭業者の貝島への三井の関与、或いは麻生の住友からの影響、磯野家の家憲のように「同家と特に昵懇の関係にあった」<sup>(42)</sup>金子堅太郎が作成している等が見られるものの、一般商工業者間でみられたことは興味深い<sup>(43)</sup>。

筑豊御三家の一角である安川・松本財閥の創設者、安川敬一郎は貝島が「行いたい事が沢山あれども井上侯が八ヶましく」とボヤいたことに対して「負債償却謝恩家憲制定など活動打ちりの養老思案を為すは大間違いなり」<sup>(44)</sup>と励ましたというが、その根底が負債にあったという点では河内卯兵衛と百田との関係も同様であろう。ただし、卯兵衛と百田との関係は金銭関係だけでなく、良い意味で個人的に深い繋がりがあったようである<sup>(45)</sup>。

#### 4 営業税、所得税からみた呉服太物商<sup>(46)</sup>

次に呉服太物商を営業税額順に見てみる（表11～表13参照）。

利用する資料はこれまで利用した『日本全国商工人名録』と博多商業会議所発行の『福博商工人名録』である。なお、『福博商工人名録』には所得税は記載されていない。

表11 営業税順位（1898年）

（単位：円）

氏名	営業税	所得税	住所
中尾 卯兵衛	216.348	43.530	福岡橋口町
吉田 又吉	161.344	64.440	博多綱場町
奥村 利助	145.602	62.054	博多靴屋町
中牟田喜兵衛	141.318	32.714	博多靴屋町
渡辺 与三郎	124.918	50.160	博多上西町
伊藤 長兵衛	91.532	—	博多掛町
小川 小三次	71.840	40.500	〃
吉田 忠次郎	67.378	7.000	〃
川野 金平	59.824	21.704	福岡本町
三苦 朝次郎	58.664	6.320	博多綱場町
宮内 延平	56.416	21.134	福岡下名島町
中牟田藤兵衛	53.852	8.000	福岡大工町
篠原 由次郎	52.884	5.560	博多町
石藏 万吉	46.012	15.900	博多下西町
吉井 保太郎	37.732	4.340	博多下土居町
福本 嘉平	36.886	9.000	博多下新川端町
具島勘右衛門	36.620	6.250	博多上市小路
石村 徳次郎	31.616	15.900	博多綱場町
檜崎 清七	31.120	3.990	博多上洲崎町
藤井 五平	30.946	22.514	博多上濱口町
竹内 佐兵衛	30.000	5.700	博多上濱口町
幸田 次平	28.960	19.470	博多中島町



表11

氏名	営業税	所得税	住所
魚住源次郎	27.202	3.400	博多網場町
井上与助	25.566	5.840	博多下西町
八谷あい	23.666	4.500	博多掛町
佐野篤次郎	21.498	54.360	博多橋口町
宮崎藤七	20.211	12.000	博多掛町
野村甚助	19.434	6.280	博多中間町
松村半右衛門	19.390	5.650	福岡紺屋町
樋口吉次	15.540	7.830	福岡薬院町
百田源七	14.876	3.250	博多行町
波多江弥七	13.120	3.480	福岡荒戸町
秋枝正四郎	12.970	3.200	博多中間町
渡辺与三郎支店	—	—	博多行町

出典：表7と同じ。

表12 営業税順位（1907年）

（単位：円）

氏名	営業税	所得税	住所
渡辺与三郎	348.18	71.64	上西町
中牟田喜兵衛	205.42	302.76	麴屋町
伊藤長兵衛	183.32	—	行町
奥村利助	144.27	162.61	麴屋町
三苫寛一郎	110.00	70.36	麴屋町
藤井伍兵衛	98.18	90.88	網場町
篠原由次郎	95.76	41.54	掛町
魚住源次郎	89.96	42.90	網場町
中牟田藤兵衛	73.86	60.56	大工町
川野金平	64.24	42.17	本町
吉田又吉	44.34	17.72	網場町
宮内いき	44.00	27.02	下名島町

表12

氏名	営業税	所得税	住所
佐野篤次郎	40.84	34.00	橋口町
吉田忠三郎	36.82	15.37	網場町
松村半右衛門	35.14	43.79	紺屋町
植崎精七	34.37	19.65	上洲崎町
中尾卯兵衛	29.79	7.80	橋口町
福本嘉平	29.30	30.26	下新川端町
戸次源次郎	28.44	27.15	箱崎町
幸田次七	23.95	9.00	中島町
大場常吉	21.70	6.84	石堂町
伊佐善三郎	20.85	15.22	西新町
門司儀社	19.39	16.02	下祇園町
百田あさ	16.30	7.45	片町
野村久七郎	15.88	7.38	中間町
篠原亀次郎	15.71	6.00	下土居町
小林島太郎	15.34	7.80	麴屋町新道
西原与八	14.73	7.82	西新町
川原田梅次郎	14.72	11.67	上市小路
武藤なを	14.05	3.50	橋口町
大曲鹿次郎	12.89	7.56	川端町
児島善次郎	12.46	70.10	中島町
岡崎元助	11.84	3.80	網場町
紙与支店	—	—	行町
木梨久太郎	—	—	下西町
百田商店	—	—	行町掛筋

出典：表9と同じ。

表13 営業税順位 (1910年)

(単位：円)

氏名	住所	営業税額
渡辺与三郎	上西町	1,354.40
伊藤長兵衛	行町	710.00
奥村利助	麴屋町	590.95
篠原由次郎	掛町	588.50
中牟田喜兵衛	麴屋町	543.55
藤井伍兵衛	綱場町	537.25
三苫寛一郎	麴屋町	503.50
中牟田藤兵衛	大工町	233.75
魚住源次郎	綱場町	201.25
川野金平	本町	197.40
児島善次郎	中島町	184.72
吉田又吉	綱場町	180.25
吉田忠三郎	綱場町	159.50
佐野篤次郎	橋口町	157.25
具島勘右衛門	上市小路町	152.90
宮内イキ	下名島町	135.00
木梨久太郎	蔵本町	133.05
篠原亀次郎	下土居町	127.32
榎崎精七	上洲崎	118.75
松村半右衛門	紺屋町	92.52
福本嘉平	下新川端町	85.75
川原田善兵衛	上市路町	80.50
武藤ナオ	橋口町	76.50
小林島太郎	麴屋町	76.10
白土源太郎	下東町	72.57
白水五三郎	下小出町	68.25
大場常吉	下呉服町	65.50
伊佐善三郎	西新町	63.70

表13

氏 名	住 所	営業税額
山 際 徳 次 郎	川 端 町	62.55
百 田 増 蔵	行 町	62.00
幸 田 辰 次 郎	中 島 町	61.50
野 村 久 七 郎	仲 間 町	60.50
門 司 儀 壯	下 祇 園 町	59.40
楢 崎 昇 次 郎	下 呉 服 町	52.75
飯 野 熊 吉	行 町	50.60
石 田 ハ ル	橋 口 町	47.50
青 木 慶 太 郎	上 市 小 路	46.55
溝 口 作 平	上 新 川 端 町	44.90
柴 田 弥 一 郎	紺 屋 町	44.75
大 山 忠 平	中 石 堂 町	43.90
秋 穂 荒 太 郎	仲 間 町	43.17
安 武 乙 吉	橋 口 町	43.10
吉 田 卯 作	綱 場 町	42.75
榊 清 蔵	綱 場 町	42.37
小 川 小 一 郎	麴 屋 町	40.65
岡 崎 元 吉	蔵 本 町	39.55
白 水 米 次 郎	下 新 川 端 町	39.35
大 曲 鹿 次 郎	川 端 町	37.80
大 場 仁 一 郎	上 市 小 路 町	37.62
西 原 与 八	西 新 町	35.82
城 後 六 蔵	下 新 川 端 町	35.80
岡 田 専 助	東 中 州 町	35.37
田 中 佐 太 郎	下 東 町	35.22
江 藤 保 太 郎	芥 屋 町	30.77
平 井 友 太 郎	西 町	29.60
川 村 庄 次	西 町	27.90

出典：表10と同じ。

以上、表11、表12、表13の推移から、営業税額が大きくなっているが、一つには営業税は1904年から1905年にかけて日露戦争による軍事費維持のため、非常特別税法による租税増徴が行なわれ、1910年4月の改正（翌年1月施行）により非常特別税法中、営業税に関する規定が廃止されるまで続けられたことも影響しているであろう。

さて、上位10位以内のうち、1898年の時点でトップでみられた中尾卯兵衛や吉田又吉、さらに小川小三次、吉田忠次郎は1907年、1910年では10位内にみられない。安定しているのは奥村利助、伊藤長兵衛、中牟田喜兵衛、渡辺与三郎らであるが、明治後期には渡辺がトップに躍進し、続いて伊藤長兵衛の躍進、中牟田は1907年に上位に位置するが1910年には若干後退、明治中期から後期にかけて三苫寛一郎、篠原由次郎や魚住源次郎が登場という状況である。上位10位以内での若干の変動はみられるものの、彼らの経営は一応安定しているといえるであろう。

また、営業税の納税額が高まり、所得税は営業税に比較すると1898年では高くなかったが1907年になると、所得税も高くなっており、彼らの営業規模が大きくなっていることがわかるが、一方で営業税納税額の推移からみて、呉服商間の営業規模の差がかなり出てきていると言えよう。

次に所得税額順にみてみる（表14～表16参照）。利用する資料はすべて『日本全国商工人名録』である。

表14 所得税順位（1898年）

（単位：円）

氏名	所得税	営業税	住所
吉田又吉	64.440	161.344	博多綱場町
奥村利助	62.054	145.602	博多靴屋町
佐野篤次郎	54.360	21.498	博多橋口町
渡辺与三郎	50.160	124.918	博多上西町
中尾卯兵衛	43.530	216.348	福岡橋口町
小川小三次	40.500	71.840	〃

表14

氏名	所得税	営業税	住所
中牟田喜兵衛	32.714	141.318	博多靴屋町
藤井五平	22.514	30.946	博多上濱口町
川野金平	21.704	59.824	福岡本町
宮内延平	21.134	56.416	福岡下名島町
幸田次平	19.470	28.960	博多中島町
石蔵万吉	15.900	46.012	博多下西町
石村徳次郎	15.900	31.616	博多網場町
宮崎藤七	12.000	20.211	博多掛町
福本嘉平	9.000	36.886	博多下新川端町
中牟田藤兵衛	8.000	53.852	福岡大工町
樋口吉次	7.830	15.540	福岡薬院町
吉田忠次郎	7.000	67.378	〃
三苫朝次郎	6.320	58.664	博多網場町
野村甚助	6.280	19.434	博多中間町
具島勘右衛門	6.250	36.620	博多上市小路
井上与助	5.840	25.566	博多下西町
竹内佐兵衛	5.700	30.000	博多上濱口町
松村半右衛門	5.650	19.390	福岡紺屋町
篠原由次郎	5.560	52.884	博多町
八谷あい	4.500	23.666	博多掛町
吉井保太郎	4.340	37.732	博多下土居町
樋崎清七	3.990	31.120	博多上洲崎町
波多江弥七	3.480	13.120	福岡荒戸町
魚住源次郎	3.400	27.202	博多網場町
百田源七	3.250	14.876	博多行町
秋枝正四郎	3.200	12.970	博多中間町
伊藤長兵衛	—	91.532	博多掛町
渡辺与三郎支店	—	—	博多行町

出典：表7と同じ。

表15 所得税順位 (1907年)

(単位：円)

氏名	所得税	営業税	住所
中牟田喜兵衛	302.76	205.42	麴屋町
奥村利助	162.61	144.27	麴屋町
藤井伍兵衛	90.88	98.18	網場町
渡辺与三郎	71.64	348.18	上西町
三苫寛一郎	70.36	110.00	麴屋町
児島善次郎	70.10	12.46	中島町
中牟田藤兵衛	60.56	73.86	大工町
松村半右衛門	43.79	35.14	紺屋町
魚住源次郎	42.90	89.96	網場町
川野金平	42.17	64.24	本町
篠原由次郎	41.54	95.76	掛町
佐野篤次郎	34.00	40.84	橋口町
福本嘉平	30.26	29.30	下新川端町
戸次源次郎	27.15	28.44	箱崎町
宮内いき	27.02	44.00	下名島町
榎崎精七	19.65	34.37	上洲崎町
吉田又吉	17.72	44.34	網場町
門司儀壯	16.02	19.39	下祇園町
吉田忠三郎	15.37	36.82	網場町
伊佐善三郎	15.22	20.85	西新町
河原田梅次郎	11.67	14.72	上市小路
幸田次七	9.00	23.95	中島町
中尾卯兵衛	7.80	29.79	橋口町
西原与八	7.82	14.73	西新町
小林島太郎	7.80	15.34	麴屋町新道
大曲鹿次郎	7.56	12.89	川端町
百田あさ	7.45	16.30	片町
野村久七郎	7.38	15.88	中間町

表15

氏名	所得税	營業稅	住所
大場常吉	6.84	21.70	石堂町
篠原亀次郎	6.00	15.71	下土居町
岡崎元助	3.80	11.84	網場町
武藤なを	3.50	14.05	橋口町
伊藤長兵衛	—	183.32	行町
紙与支店	—	—	行町
木梨久太郎	—	—	下西町
百田商店	—	—	行町掛筋

出典：表9と同じ。

表16 所得税順位 (1911) 年

(単位：円)

氏名	所得税	營業稅	住所
中牟田喜兵衛	727.50	543.55	麴屋町
藤井伍兵衛	481.80	474.50	網場町
三苫寛一郎	426.16	503.50	麴屋町
篠原由次郎	362.40	588.55	掛町
渡辺与三郎	329.46	719.40	下土居町
児島善次郎	239.34	184.72	中島町
中牟田藤兵衛	197.47	233.75	大工町
川野金平	160.35	170.25	本町
松村半右衛門	153.59	82.12	紺屋町
宮内イキ	139.19	135.00	下名島町
魚住源三郎	110.12	201.25	網場町
佐野篤次郎	107.08	157.25	橋口町
吉田又吉	93.58	180.25	網場町
川原田梅次郎	86.20	80.50	上市小路町
吉田忠三郎	86.02	159.50	網場町
門司儀壮	63.36	59.40	下祇園町



表16

氏名	所得税	営業税	住所
榎崎 精七	59.40	118.75	上洲崎町
小林 島太郎	41.40	76.10	魏屋町
白水 五三郎	37.85	68.25	下小山町
野村 久七郎	35.28	60.50	中間町
榎崎 昇次郎	22.68	52.75	下呉服町
大場 常吉	19.27	65.60	下呉服町
福本 幸次郎	18.76	85.75	下新川端町
伊藤 長兵衛	—	710.00	行町
大曲 鹿次郎	—	43.87	下新川端町
渡邊興三郎支店	—	467.00	行町
貝島勘左衛門(貝島勘右衛門カ)	—	153.90	上市小路町
占部 嘉平	—	43.20	橋口町
幸田 トヨ	—	61.50	中島町

出典：商工社編『日本全国商工人名録』（第四版）商工社、1911年。

所得税も営業税と同じく1904年、1905年に増徴されているので納税額の規模についてはその影響もあったであろう。

表14、表15、表16から、営業税の推移と同じように上位10位以内でみれば、1898年にトップにいた吉田又吉や5位の中尾卯兵衛は1907年、1911（明治44）年には10位内にみられないが、中牟田喜兵衛や藤井伍兵衛、三苦寛一郎の上昇、営業税でトップにあった渡辺与三郎はほぼ定位置、奥村利助が1911年には消えている。一方で営業納税額上位10名にみられなかった児島善次郎や松村半右衛門が上昇している。ただし、これは資料の統計上の処理があり、奥村利助は木綿商として所得税525円81銭、営業税269円70銭、木梨久太郎の所得税48円30銭、営業税133円5銭となっており、奥村利助の所得税は呉服太物でみれば上位2番目に位置する。

以上から営業税、所得税における呉服商の納税額順位は必ずしも両者一致

しないが、渡辺、中牟田、奥村、藤井、三苦などの伝統を持つ商人は営業納税額、所得納税額からみて、その活動は衰えることなく、依然としてその地位を保っているといえよう。

しかし、それらの商人でも、中牟田喜兵衛や奥村利助等は次第に所得税の方が高くなり、藤井伍兵衛はほぼ均衡、渡辺与三郎、三苦寛一郎、篠原由次郎は営業税が高く、特に渡辺与三郎のそれは際立っている。他は傾向としては両税納税額はほぼ均衡か、あるいはやや営業税が高いものの、それらの中でも、所得税の方が高いのは児島善次郎、松村半右衛門等で、営業税の方が高いのは吉田又吉、吉田忠三郎、楯崎精七等というような特徴が見られる。

## 5 呉服商人の企業者活動の一端について

明治期を通して有力な呉服商人が育ちつつあったことは先にみた如くであるが、彼等は家業の経営以外にどのような行動をとったのであろうか。この点について迎は福岡県下の銀行、鉄道、炭坑、埋築・浚渫（築港）、紡績の有力企業を取り上げ分析している<sup>(47)</sup>。ここでは2、3のケースを取り上げ、彼らの地域経済への参加、或いは企業者活動の一端についてみておこう。

### 1) 博多商業会議所

博多商業会議所は1879（明治12）年10月設立の福岡商法会議所から1888（明治21）年7月の福岡商工を経て1891（明治24）年10月に設立された。

1879年10月、福岡商法会議所が設立されたときの発起人の業種内訳は工業3名、醸造4名、商業16名、金融3名、その他6名（内不明2名）からなり、商業のうち呉服関係者は相部藤右衛門、大山忠平、中尾卯兵衛、井上治右衛門、福本嘉平、小川小七の6名と多く、これは「他の会議所にはない特徴」<sup>(48)</sup>であった。このほかに児島善三郎（洋物雑貨）の名前や奥村利助（荒物）もみられ、両名を加えると商業の約半数が呉服関係者で占められる。明治年間の呉服関係者の会員（議員）は次の通りである<sup>(49)</sup>。

○1888年7月～1891年7月（福岡商工時代）

中尾卯兵衛、渡辺與三郎、吉田又吉、野村久吉、藤井五平、奥村利助、

磯貝治兵衛（呉服太物組合）

- 1891年10月～1893年3月（博多商業会議所時代）  
中尾卯兵衛（副会頭）、野村久一郎、野村久吉、吉田又吉、奥村利助、  
渡辺与一（特別会員、1891年12月辞任）
  - 1893年3月～1895年5月  
中尾卯兵衛（副会頭）、野村久一郎（常議委員）、野村久吉、奥村利助、  
吉田又吉
  - 1895年5月～1897年3月  
中尾卯兵衛（副会頭、同29年没）、野村久一郎（常議委員、同30年3月  
辞任）、吉田又吉、野村久吉
  - 1897年3月～1899年3月  
吉田又吉、渡辺与三郎
  - 1899年3月～1901年3月  
石蔵利平（1899年5月、紫藤儀平辞任後後任）、渡辺与三郎、門司儀壯、  
石蔵万吉
  - 1901年3月～1902年12月  
門司儀壯
  - 1902年12月～1904年12月  
児島善次郎、吉田又吉
  - 1904年12月～1906年12月  
児島善次郎、門司儀壯
  - 1906年12月～1908年12月  
門司儀壯、野村久七郎、中牟田藤兵衛
  - 1908年12月～1910年12月  
中牟田藤兵衛（常議員）、野村久七郎、三苫寛一郎、門司儀壯
  - 1910年12月～1912年12月  
三苫寛一郎、門司儀壯、野村久七郎、吉田又吉
- この推移からすれば、明治中期頃までは呉服商人の比率は高く、明治中期

になって減少、後期に微増という状況である。この中でも吉田又吉は当初から議員として活躍しており、後期には三苦寛一郎や門司儀壯や野村久七郎らが続く。この中で、吉田や三苦は会社役員として多数の会社に関係している（後掲第21表参照）。

ところで、1902（明治35）年3月、商業會議所法が制定され（同年7月1日施行）、同法により博多商業會議所でも改変手続きを始めるが、議員選挙の実施にあたって様々な動きがあったようである。河内卯兵衛の『日記』にも「来る十一月挙行の商業會議所議員選挙に付種々の運動行われ為めに市中今より騒然たるものあり」<sup>60</sup>と記されている。

同年10月2日の『福岡日日』新聞には、突如として同會議所議員総改選にあたり渡辺与三郎、太田清蔵の両名で「生等聊稽フル所アリ茲ニ公平ナル選挙ヲ以テ左記諸氏ヲ候補者適任ト認メ之ヲ選挙スル事ニ決定ス」と30名が公表された。

このことについて渡辺与三郎は、太田との候補者の発表は「個人としての意想を發表したものに過ぎ」ず、一部の団体と協定していたのではないかという疑惑に対する否定、候補者との交渉も一切無く、現在に至るまでの商業會議所の活動が「余り問題高遠に過ぎ地方の盛衰利害問題の如き殆ど無視せられたるやの嫌ひ」があり、これからは地方の各種実業団体と連絡をとりながら「地方問題」に対応する必要があること、また、「近頃會議所の経費節減論」の問題も、議員が職を熱心に、その理想を実行するには経費は多少膨張するがその地方に蒙る利益は大なるものがあること、博多の各団体はややもすれば「大勢に逆らひ輕挙に出づることなきにしもあらざりし」という状況であるが、「協同一致以て地方の為め隆盛を図」る必要があること等が大事で、候補者は「此等の人を以て適當と思為し」と語っている。

その後、選挙が近づき、これらの候補者や、福岡会、博多実業団体や博多実業倶楽部等の会員と会見し「大体の賛成」や「格別意見の徑庭もなき模様」で、「此等の団体とも出来得るだけ円満に妥協し選挙の方針を定めて無事の間に好結果を奏せんことを期」し、同年11月25日に「博多団体、実業倶楽部、

福岡有志、博多有志ト協議決定」として再び30名の候補者を発表した（ただし、この時に発表された30名は10月2日に発表された候補者中、3名が候補を辞退したので新たに3名入れ替わっている）。その際、もしこの候補者以外の人物を投票した者は「市ノ平和ヲ破壊スルモノト見做ス」とまで強く訴えている<sup>(51)</sup>。

また、これより先、同年10月11日の『福岡日日』には「商業会議所と商工業者」と題して商業会議所廃止説に対する意見に対して、商業会議所の機能、役割について縷々述べられている。記事のタイミングからして、恐らく、商業会議所の役員改選を意識しての掲載と思われる。

河内の『日記』にみられる「種々の運動」がいかなる理由で、どのように行われていたのかは不明であるが、渡辺や太田が福博の将来を見据えた各団体との協調や商業会議所の機能、役割の強化を狙っていたことは理解できよう。そして、役員選挙の結果、小河久四郎から商人出身の太田清蔵が会頭を引き継ぐことになった。

しかし、このような状況は、この時ほど激しくないにせよ、度々みられたようである。1904年、1905年の河内卯兵衛の『日記』には、商業会議所の半数改選につき太田清蔵や他の有力者から議員や役員の選定依頼があったことが記されており、卯兵衛は「倶楽部側及博多団体側其他野心満々たる」<sup>(52)</sup>者と度々話し合いをし、このために奔走している<sup>(53)</sup>。

地域における経済的發展はそれぞれの利害調整を複雑にしていってようであり、これを取りまとめる、言うなればオルガナイザー、或いはリーダーシップ的な役割を卯兵衛に求めたのであろう。

## 2) 協成組と博多荷主組

1884（明治17）年7月、福博商業家有志が海陸運輸業者と諸般の契約を結び、「商事万般の進歩を謀る目的」<sup>(54)</sup>をもって協成組という組織を結成した。同団体は「当地商業家団体の嚆矢」<sup>(55)</sup>といわれる。

その創立の要旨は「凡ソ事ハ協同ヲ以テ成リ…福岡区内ノ吾人商売ハ果シテ能ク協同ノ力ヲ有ツモノト云フベキ乎…」<sup>(56)</sup>と福博の商業活性化のための

団結を促したものである。

「第一条 此団結ハ協成組ト称シ福岡区内商人左ノ希望ヲ有スル者ヲ以テ組成ス

- 一 協同一致ノ進歩ヲ取ル
- 一 眼前ノ小利ニ迷ヒ異日ノ大計ニ遺ル可ザル
- 一 進取活発努メテ自治ノ精神を發揮スル
- 一 団結合同ノ力ニ頼ツテ商權ヲ恢復皇張スル
- 一 詐譎ノ所為ニ出デ結合力ヲ虧損スベカラザル」<sup>(57)</sup>

同会は単に福博の団結を唱えただけでなく、月一回の集会の開催、集会の時には各自商品を持ち寄り品評会を行ったり、売買契約を結んだりしており、「会員の結合力も堅く商品共進会やうのものも出来るに及」<sup>(58)</sup>び、このような試みは「共進会の先駆をなすもので、それが自主的に開かれたところに福博実業家の進取性」<sup>(59)</sup>を読みとることが出来よう。

呉服商人は積極的にこの組織の組合員として参加している。当初の主な者は呉服関係では中尾卯兵衛、藤井伍平、奥村利助、秋枝正四郎、野村久作、渡辺与三郎、吉田又吉、伊藤長兵衛、小川小七、児島善三郎等の名前が見られる<sup>(60)</sup>。すなわち、彼らは家業の経営に終始するだけでなく、積極的に地域活性化のためにこのような組合に参画している。

また、組合員の中には福岡商法会議所社員も多かったことから、両者は合流し、沈滞気味であった商法会議所の復興計画を練り、福岡商法会議所規定を決定するに至った<sup>(61)</sup>。

1890（明治23）年5月に博多荷主組が結成されたのは、九州鉄道の開通により取引の重点が門司に移る不安や1889（明治22）年に博多港が特別輸出港に指定され、貿易の拡大が期待されたためである。頭取、相談役20名中、渡辺与三郎、中尾卯兵衛、奥村利助、吉田又吉、野村久吉ら呉服商人が加わっており、その80%は福岡商工会会員であった<sup>(62)</sup>。

なお、協成組は商業会議所、同業組合、荷主組合等が成立したことにより、「共成組設立の当時とは実に商家の面目を一変したれば該組を永末存置する<sup>(ママ)</sup>

の必要もなし」として、1896（明治29）年1月26日に解散した<sup>(63)</sup>。

### 3) 博多絹綿紡績会社

1896（明治29）年に、渡辺与一、太田清蔵などを発起人として博多絹綿紡績会社の設立が企てられた<sup>(64)</sup>。同年1月9日の発起人総集会にて創立委員として太田清蔵、渡辺綱三郎、堺宗一郎、是松右三郎、渡辺伊助、藤井伍平、奥村利助が当選し、相談役として磯野七平、渡辺与一、国武喜次郎、中尾卯平衛、吉田又吉が推薦された<sup>(65)</sup>。メンバー構成から分かるように、大部分が繊維関係商人であり、彼等が会社設立に積極的に参画していることが窺えよう。

同社の同年1月22日現在の発起株は太田清蔵300株、奥村利助300株、渡辺与一300株、渡辺与三郎230株、河内卯兵衛200株、藤井五平200株、渡辺治平200株、渡辺渡三郎200株、中尾卯兵衛150株、吉田又吉150株、小川小三次100株、中牟田喜兵衛100株、渡辺伊助150株、野村久次100株というように、呉服・綿糸関係商人が多い。しかも、同社は発起株の比率が極めて高く、発行株式の78.6%にも達するという特徴をもっていた<sup>(66)</sup>。

社長には太田清蔵、常務取締役是松右三郎、同渡辺渡三郎、取締役兼支配人日幡一任、取締役奥村利助、同渡辺伊助、監査役磯野七平、同渡辺与一、同中尾卯平が就任した<sup>(67)</sup>。

同社は1902（明治35）年鐘淵紡績株式会社と合併するが、その中心的人物であった河内卯兵衛はその影響について『日記』に次の如く記している<sup>(68)</sup>。

「地方経済界の為に自己の便利を顧みず鐘紡合併を唱道し、直接自己の金融に困難を来すべきは固より予期したる処なりしが、偕て合併後の取引は其営業方針一変、些少の仮借なく一切の取引を現金取引に更ため、且つ従来(継)の約手は経続を許さる事としたる為、折柄農繁期に際し金融上非常の打撃となり生来曾て無き金繰りの苦勞を為す」（1902年10月16日）。

このことから、河内が福岡の経済のことを考え合併を推進したこと、合併により取引方法の変更の対応に苦慮していること等が窺える。言い換えるならば、会社存続のためには中央資本に依存せざるを得なかったが、それは、

これまで運営に携わってきた地方商人との乖離を始める状況が生まれてくることを示しているのではないであろうか。

そして、このような状況は河内の家業に対する経営について深く考えさせることになったようである。

「数年来積弱の末、加ふるに今年博紡合併以来愈々金融困難となり茲に年末に際し明年よりは何とか改革を為さ、るべからざるに至り左の事を考ふ…三四年來經濟界大悲運の結果、従って従来の財産も概ね消散し去りたれば、此際遠慮なく貸金取替金等の回収に努力し借金を減し利子支払を減し困難の寛和(ママ)に力する事。可成丈け世間事に遠ほさかり更らに一段と糸店の繁盛に熱心する事」(『日記』1902年末)。

「世間事に遠ほさかり」とはいえ、その後も河内は營業稅調查顧問や福岡市街路拡張調査委員、博多實業俱樂部副会頭に推薦されるなど<sup>(69)</sup>、多忙を極めている。

1906(明治39)年には「専心經營之結果、漸次少康を得つ、ありし余の經濟狀態」<sup>(70)</sup>と、經營狀態が上向いてきたようであり、また、同年12月には福岡商工会議所議員の立候補を勧誘され、「從來余は他に志のある為め地位名譽は人にのみ与えて自己は辞讓し敢て名を欲せざりしが…今回愈々博多の虫と決定したる事なれば従来の様子を改め、議員事にも加わるべしと考え此候補者たる事を承諾」<sup>(71)</sup>し、当選している。

この博多絹綿紡績会社の失敗は思いの外、その經營に携わった商人に何等かの影響をもたらしたと思われる<sup>(72)</sup>。

#### 4) 株式会社博多貿易商会と福博遠洋漁業株式会社

1911(明治44)年、福博の有力商人により、(株)博多貿易商会の設立が計画された(同年6月設立)。

同社は当初資本金が20万円であったが、株式の募集は捗々しくなかった。しかし、時を同じくして福博遠洋漁業株式会社の設立計画が立てられたとき、博多貿易商会は資本金を50万円とした。福博遠洋漁業株式会社は資本金100万円(20,000株)で、1万株は發起人の1人である吉田増太郎が引受け、



5,000株を博多貿易商会在引受け、さらに1,000株を下関方面で、4,000株を発起人及び賛成者での一般公募という計画であった<sup>(73)</sup>。博多貿易商会在は「遠洋漁業株の利益に依りて当分の地盤を固め置き将来に於ける博多港貿易の発展に資すべき計画」<sup>(74)</sup>で、独力による経営は設立当初から早くも挫折しかけていたのである。しかし、貿易に視点を据えた計画は幅広い商人の参加を容易にした。

博多貿易商会在の発起人は以下の顔ぶれであり、当時の博多の有力商人が結集していた（表17参照）。

表17 株博多貿易商会在発起人および引受株数

氏名	職業	株数	役員歴(1911年)
渡辺与八郎	呉服商	300	博多電気軌道(株)取締役
山口恒太郎	新聞記者	200	博多電燈(株)社長、博多湾鉄道(株)取締役、(株)博多冷蔵庫取締役、若松電燈(株)取締役、九州電気軌道(株)取締役、福博電気軌道(株)取締役
石村虎吉	煙草商	200	博多瓦斯(株)社長
渡辺綱三郎	煙草製造販売	200	博多瓦斯(株)取締役、福博電気軌道(株)、(株)博多冷蔵庫取締役
三苦寛一郎	呉服商	200	博多瓦斯(株)取締役、博多通送(株)社長、福博電気軌道(株)監査役
河内卯兵衛	綿糸商	200	博多電気軌道(株)取締役
吉田増太郎		200	
紫藤栄一	海産物商	200	博多魚市(株)取締役
谷彦一	醸造業、藍商	200	御笠銀行取締役、博多電気軌道(株)取締役、博多瓦斯(株)監査役
高木常之助		150	
原三信	医師	150	
岸本伝吉		100	
矢野卯兵衛	海産物商	100	博多魚市(株)取締役
深見平次郎	鑄造業	100	
社家間善次郎	米穀商	100	

表17

氏名	職業	株数	役員歴(1911年)
牟田口宗七	履物商	100	(株)博多晴心館取締役、博多瓦斯(株)監査役
野村久七郎	呉服商	100	
長野嘉久壽		100	鎮西倉庫(株)取締役
倉成久米吉	旅人宿業	100	
榎本与七郎	医師	100	
平岡良助	鉱業	100	博多電気軌道(株)社長
河原田平助	文具商	100	
谷理蔵	煙草商	100	三笠銀行監査役、鎮西倉庫(株)監査役
岡部慶太郎		100	鎮西倉庫(株)取締役
大野仁平	鉱業	100	(株)共文社監査役
大神太郎助		100	博多電気軌道(株)取締役
樋口弥十郎		100	早良貯蓄銀行取締役、博多電気軌道(株)監査役
立石善平	乾物	100	
奥村七郎		100	
桜井高尚		100	
鶴田多門		100	
下沢善右衛門	小間物、洋物雜貨商	100	
中牟田喜兵衛	呉服商	100	
中牟田藤兵衛	呉服商	100	
大谷万吉		100	
松尾利平	薬種商	100	
池見辰次郎		100	
齋藤徳司		100	
岩崎茂兵衛		100	
平山久吉		100	
阿部松次郎		100	
山本育英		50	
渡辺潮		50	博多電気軌道(株)専務取締役

表17

氏名	職業	株数	役員歴(1911年)
太田太兵衛		50	
古賀壮兵衛	鉱業	50	
小島尚吾		50	
津田孫右衛門	海産物商	50	
半田大軒		50	
松尾伊和治		50	

出典：『門司新報』1911年4月1日。ただし、職業は商工社編、前掲書；前掲「電話番号簿」、役員歴は由井常彦・浅野俊光編『日本全国諸会社役員録』15、柏書房、1911年等による。

同社の役員は取締役高木常之助、同石村虎吉、同渡辺綱三郎、同河内卯兵衛、同谷彦一、同三苦寛一郎、同紫藤栄一、監査役倉成久米吉、同山口恒太郎である<sup>(75)</sup>。

ここでは、参考として1911年時点での商工業者の会社役員就任状況を示しているが、鉄道、瓦斯会社に役員就任しているものが多い。

一方、福博遠洋漁業株式会社の発起人は渡辺与八郎、吉田増太郎、山口恒太郎、石村虎吉、渡辺綱三郎、三苦寛一郎、谷理蔵、津田孫右衛門、矢野卯兵衛外数名となっており、社長には谷理蔵、専務取締役吉田増太郎、取締役石村虎吉、同渡辺綱三郎、同河内卯兵衛、同矢野卯兵衛、同三苦寛一郎、監査役松尾利平、同津田延次郎、同河原田平助が就任している<sup>(76)</sup>。

発起人から分かるように、両社は同じ顔ぶれで計画がなされていた。

今、1912年の福博遠洋漁業株式会社株主から300株以上をみれば表18の如くである。

株主構成から見れば、三苦寛一郎以外の有力な呉服商が上位株主に現れてこない、香川県からの出資が目立っているという内容である。

また、当初の計画と異なり博多貿易商会の持株数は5,000株ではなく、1912年12月31日現在では1,019株にすぎない。博多貿易商会の持ち株数は1913

表18 福博遠洋漁業株式会社株主 (1912年)

氏名	持株数	氏名	持株数
吉田増太郎	5000	中西昌樹(筑紫郡)	387
谷慶祐	1246	永田重雄(久留米)	366
吉田一	1140	香西安吉	350
博多貿易商会	1019	矢野卯兵衛	314
吉田英二(香川県)	580	三苫朝子	314
堀チヨ(筑紫郡)	550	三苫寛一郎	300
合田深藏(香川県)	509	吉田伊三郎	300
吉田ヤスエ(香川県)	460	横江駿一(香川県)	300
吉田二三子(香川県)	430	他計121人	20000株

出典：「株主名簿」(『河内文書』)。

(大正2)年6月30日現在では469株、同年12月末日現在には412株、1915年3月31日現在では288株まで減少している<sup>(77)</sup>。

1912年の役員及び持株は、取締役社長石村虎吉(200株)、専務取締役吉田増太郎(5,000株)、取締役渡辺綱三郎(106株)、同河内卯兵衛(100株)、同矢野卯兵衛(314株)、同三苫寛一郎(300株)、監査役河原田平助(106株)、同津田延次郎(100株)、同原三信(50株)<sup>(78)</sup>となっている。また、他の有力な呉服商は中牟田喜兵衛213株、具島勘右衛門17株といった所有状況であり、出資に関してきわめて少なく、所有株式に関する限り呉服商人の比率は低く、三苫寛一郎、中牟田喜兵衛がみられる程度である。

なお、同社は1914(大正3)年4月、博多汽船漁業株式会社に合併され、社名を博多遠洋漁業株式会社に変更し、同年6月、共同製氷株式会社を買収した。

博多汽船漁業株式会社は1910(明治43)年9月に資本金150,000円で設立され、取締役岡部慶太郎、同荒津長七、同針外虎太郎、同津田幾次郎、同西頭宗太郎、監査役に太田太兵衛、同林信行、同師岡金吉、支配人日成元俊である<sup>(79)</sup>。同社は1912(大正元)年に豊魚株式会社を合併し、資本金を660,000

表19 博多汽船漁業株式会社 株主名簿

人 名	旧 株	新 株	合 計	備 考
荒 津 長 七	190	615	805	
津 田 幾 太 郎	20	755	775	
長 野 嘉 久 壽	170	535	705	
範 多 竜 太 郎		600	600	大阪
針 外 虎 太 郎	145	363	508	
吉 原 敬 介	20	475	495	
松 尾 イ チ	55	370	425	筑紫郡
太 谷 万 吉	70	275	345	
太 田 大 次 郎	100	200	300	
永 田 正 澄	60	180	240	三井郡
中 尾 篤 郎	30	175	205	
長 野 嘉 平	75	130	205	
中 牟 田 繁 三 郎	60	140	200	
末 永 壽	200		200	
具 島 又 次 郎		200	200	朝倉郡
生 井 常 也		200	200	筑紫郡
他計156名	3000	10200	13200	

(注) 備考中の空欄は福岡市。

出所：「第五回営業報告書」(大正元年下半期)(『河内文書』)。

円(13,200株)に変更した<sup>(80)</sup>。同社の1912年下半期の役員及び主要株主(200株以上)を見れば表19の如くである。

取締役社長太田大次郎、常務取締役津田幾太郎、取締役荒津長七、同針外虎太郎、同西頭宗太郎、同吉原敬介、同長野嘉久壽、監査役師岡金吉、同太田太兵衛、同林信行、同高梨東太、相談役大野仁平、同太田清蔵、同三好光三郎である。

表19から、株主が多数とはいえ、監査役以外、相談役以外はほぼ上位株主が役員をしめている。また、有力呉服商の存在は見られず、わずかに中牟田

喜兵衛が旧株100株を所有しているにすぎない<sup>(81)</sup>。

博多汽船漁業株式会社に合併される直前の共同製氷株式会社は資本金300,000円で、専務取締役は津田幾次郎、常務取締役は山本育英、取締役吉田増太郎、同谷邊祐、同荒津長七、同安達三太郎、同河内卯兵衛、監査役は針貝虎太郎、同西頭宗太郎、同津田延次郎であった。

「株主名簿」によれば、総株数6,000株、株主47名中、上位株主は博多汽船漁業株式会社1,750株、福博遠洋漁業株式会社1,250株と両社で半数を占め、次いで荒津長七710株、津田幾次郎403株、吉田増太郎335株、谷慶祐245株、安達三太郎110株、針貝虎太郎100株、白水梅太郎100株、以下となっている<sup>(82)</sup>。

さて、1914（大正3）年4月に誕生した博多遠洋漁業株式会社は取締役社長太田大次郎、専務取締役吉田増太郎、同津田幾次郎、常務取締役谷慶祐、取締役伊藤公甫、同河内卯兵衛、同荒津長七、監査役大野徳太郎、同師岡金吾、相談役大野仁平、同太田清蔵である<sup>(83)</sup>。

総株数27,000株、株主265名中、上位10名の株主は吉田増太郎2,585株、谷慶祐1102株、長野嘉久壽975株、吉田一714株、荒津長七705株、石井誠700株、河内八郎700株、吉田英二616株（香川県）、吉原敬介600株、藤金作572株であり、300株以上は21人である。有力呉服商人（一族を含めて）の株の所有状況をみても、中牟田喜兵衛279株、中牟田藤兵衛51株、中牟田繁三郎210株、中牟田ミツエ40株、渡辺恭一郎175株、渡辺綱三郎24株、渡辺与七郎7株、三苦朝子215株、三苦寛一郎210株、具島勘右衛門11株、百田源七24株、松村半右衛門5株といった状況であり、中牟田、三苦が目立つものの、呉服商の姿は小さくなっている<sup>(84)</sup>。

#### 6) 博多通送株式会社

同社は1910年、福岡市における九州沖縄八県聯合共進会開催を機に地元資本による運輸事業の企画に端を発している。同年7月に発起人会、9月10日に創立総会を開き、同社は設立され、同時に内国通運株式会社博多・吉塚両取引店を買収してその業務を継承したものである<sup>(85)</sup>。

創立事務所は内国通運株式会社博多取引店内に設置され、同社の定款作成

表20 博多通送株式会社発起人

永 添 克 次 郎	200	渡 辺 綱 三 郎	50
渡 辺 与 八 郎	50	中 牟 田 久 兵 衛	50
河 内 卯 兵 衛	50	牟 田 口 宗 七	50
具 島 勘 右 衛 門	50	野 村 久 七 郎	50
安 川 伊 三 郎	50	山 口 恒 太 郎	50
三 苦 寛 一 郎	50	松 島 晨 平	50
下 澤 善 五 郎	50	篠 原 由 次 郎	50
太 田 大 次 郎	50	石 村 虎 吉	50

出典：「博多通運株式会社株式申込ノ件」（『渡辺文書』）。

は1910年7月11日に作成され、貨物運送、貨物運送取扱、貨物留置保管、品代金立換、其他付帯事業を目的としており、資本金は100,000円である<sup>(86)</sup>。

発起人氏名及び各自引受株数は表20の如くである。

役員は取締役社長三苦寛一郎、専務取締役永添克次郎、取締役渡辺綱三郎、同野村久七郎、同森包之助、監査役員具島勘右衛門、同篠原由次郎である<sup>(87)</sup>。

この内、永添克次郎は内国通運株式会社の博多支店長であり、それ以外は同社は繊維関係者を中心として設立、運営がなされていたと言えよう。

明治後期に計画がなされたこれらの貿易、運送会社への商人の参加は市場拡大ということがあげられようが、博多商人はこの時期の新規会社の設立についても積極的に関与していたことが窺える。

## 6 呉服商の役員就任状況

最後に、呉服太物商の会社経営への関与という点を見ておきたい。

表21は『日本全国諸会社役員録』から1893（明治26）年から1912年（明治45）年における呉服太物商の役員就任状況を纏めたものである。

表21によれば、中牟田喜兵衛、中牟田藤兵衛のように一つの企業に、しかも就任年数も短期というケースもあるが、ほぼ、主要呉服商は明治期に設立された複数の会社の役員に就任し運営に携わっている。役員就任数は明治中

表21 主要呉服太物商の会社役員就任状況（明治26年～明治45年）

人 名	会 社 名	役 職
石 蔵 利 平	博多魚市株式会社	専務取締役（30～33年）、取締役（34～35年）
石 蔵 利 平	石蔵酒造株式会社	取締役（36年）
石 蔵 利 平	石蔵商店	取締役（36～45年）
石 蔵 利 平	博多土居銀行	取締役（31～35年）
伊 藤 長 兵 衛	博多競商株式会社	監査役（33年）
小 川 小 三 次	太宰府製糸株式会社	取締役（30～32年）
小 川 小 三 次	博多競商株式会社	取締役（32～33年）
奥 村 利 助	筑紫銀行	取締役（26～29年）
奥 村 利 助	博多絹綿紡績株式会社	取締役兼支配人（30年）、監査役（31年）、常務取締役（32年）、取締役（33～35年）
具 島 勘 右 衛 門	博多競商株式会社	監査役（31～33年）
具 島 勘 右 衛 門	博多通送株式会社	監査役（44～45年）
児 島 善 次 郎	久留米米穀取引所	理事（30年）
児 島 善 次 郎	博多米穀取引所	監査役（31～34年）
児 島 善 次 郎	冷泉汽船株式会社	監査役（35～38年）
児 島 善 次 郎	鎮西倉庫株式会社	監査役（37～45年）
篠 原 由 次 郎	博多競商株式会社	監査役（34～35、37～43年）
篠 原 由 次 郎	博多通送株式会社	監査役（44～45年）
中 尾 卯 兵 衛	九州生命保険株式会社	取締役（28～29年）
中 尾 卯 兵 衛	十七銀行	取締役（26～29年）
中 尾 卯 兵 衛	博多競商株式会社	取締役（33年）
中 牟 田 喜 兵 衛	博多競商株式会社	監査役（31～32年）
中 牟 田 藤 兵 衛	福岡築港株式会社	監査役（40年）
野 村 久 一 郎	筑紫銀行	副頭取（26～27年）
野 村 久 一 郎	博多米穀取引所	理事長（27～30年）
野 村 久 一 郎	若松築港株式会社	取締役（27～28年）
野 村 久 七 郎	博多競商株式会社	取締役（31、34～40、43～45年）、常務取締役（41～42年）



表21

人 名	会 社 名	役 職
野村久七郎	博多瓦斯株式会社	監査役 (42～44年)
野村久七郎	筑紫水力電気株式会社	取締役 (43年)
野村久七郎	博多通送株式会社	取締役 (44～45年)
野村甚助	北野銀行	監査役 (38～45年)
藤井五平	筑紫銀行	取締役 (26～29年)
藤井五平	博多絹綿紡績株式会社	監査役 (31～33年)
松村半右衛門	博多競商株式会社	取締役 (36～45年)
三苦寛一郎	丸三合名会社	代表社員 (34～37年)
三苦寛一郎	博多通送株式会社	社長 (44～45年)
三苦寛一郎	八幡電燈株式会社	取締役 (43年)
三苦寛一郎	株式会社博多冷蔵庫	取締役 (42～45年)
三苦寛一郎	博多瓦斯株式会社	取締役 (42～45年)
三苦寛一郎	福博電気軌道株式会社	監査役 (44年)
三苦寛一郎	株式会社博多貿易商会	取締役 (45年)
三苦寛一郎	福博遠洋漁業株式会社	取締役 (45年)
宮崎藤七	博多競商株式会社	取締役 (31～35年)
門司儀壯	冷泉汽船株式会社	取締役 (41～43、45年)
百田源七	博多競商株式会社	取締役兼支配人 (31～32年)、取締役 (33年)、 社長 (34～36年)
百田源七	萬歳館	取締役 (30～34年)、社長 (35年)
吉田忠兵衛	吉田合名会社	代表社員 (38年)
吉田又壽	博多汽船株式会社	取締役 (36年)
吉田又壽	博多製陶株式会社	取締役 (42～43年)
吉田又壽	冷泉汽船株式会社	取締役 (36～37年)
吉田又吉	筑紫銀行	取締役 (26～29年)
吉田又吉	鎮西倉庫株式会社	監査役 (34～35年)
吉田又吉	博多汽船株式会社	取締役 (31～35年)
吉田又吉	博多電燈株式会社	監査役 (30～31年)

表21

人 名	会 社 名	役 職
吉 田 又 吉	福岡貯蓄銀行	取締役 (31~32年)
吉 田 又 吉	萬歳館	取締役 (31年)
吉 田 又 吉	博多競商株式会社	社長 (31~32年)
吉 田 又 吉	博多米穀取引所	監査役 (27~30年)

備考：具島勘右衛門は引用資料では具島勘右衛門となっているが、「具島」が正確と思われるので、ここでは具島勘右衛門として扱っている。

出典：由井常彦・浅野俊光編『日本全国諸会社役員録』（1～16）柏書房、1988～1989年。

期までは吉田又吉（又壽）が圧倒的に多いが、石蔵利平、中尾卯兵衛らが3～4社に（ただし、石蔵は同族会社での役員が2社あるが）、その他は野村家のように一族で就任という状況であり、明治後期になると三苦寛一郎が目立ってくる。

役員就任時期をみてみれば（表22参照）、その設立時期か、それに近い時期に就任する状況がみられ、有力な呉服商は会社設立時の運営に対して一定の役割を担っていたと言えよう。

会社の特徴でいえば、筑紫銀行、博多競商株式会社、博多通送株式会社は呉服商の役員就任率が高い。

博多競商株式会社の営業目的は「呉服販売」、「織物其他諸雑貨委託販売」等となっていることから<sup>(88)</sup>、繊維関係を中心とする商人がより多く参加して設立したと考えられる。

これまでみてきたように、呉服太物商は明治初期から地域経済のために活動していた。しかし、それは限られた呉服太物商たちであり、また、有力商人の中にも中牟田家や小川家のようにあまり会社の運営や出資にタッチしない商人もみられ、その活動には違いがみられる<sup>(89)</sup>。

表22 主要呉服太物商の会社別役員就任状況 (1893～1912年)

会社名	人名	役職	創立年月	資本金
石蔵酒造株式会社	石蔵利平	取締役(36年)	M35.10	25,000
株式会社石蔵商店	石蔵利平	取締役(36～45年)	M36.1	5,000
株式会社久留米米穀取引所	児島善次郎	理事(30年)	M27.7	※15,000
株式会社博多米穀取引所	児島善次郎	監査役(31～34年)	M26.8	※30,000
株式会社博多米穀取引所	野村久一郎	理事長(27～30年)		
株式会社博多米穀取引所	吉田又吉	監査役(27～30年)		
株式会社博多貿易商会	三苫寛一郎	取締役(45年)	M44.6	250,000
株式会社博多冷蔵庫	三苫寛一郎	取締役(42～45年)	M41.11	150,000
株式会社萬蔵館	吉田又吉	取締役(31年)	M30.1	7,000
株式会社萬蔵館	百田源七	取締役(30～34年)、 社長(35年)		
北野銀行	野村甚助	監査役(38～45年)	M30.9	50,000
九州生命保険株式会社	中尾卯兵衛	取締役(28～29年)	M28.4	150,000
十七銀行	中尾卯兵衛	取締役(26～29年)	M10.11	105,000
太宰府製糸株式会社	小川小三次	取締役(30～32年)	M29.8	※4,250
筑紫銀行	奥村利助	取締役(26～29年)	M14.3	120,000
筑紫銀行	野村久一郎	副頭取(26～27年)		
筑紫銀行	藤井五平	取締役(26～29年)		
筑紫銀行	吉田又吉	取締役(26～29年)		
筑紫水力電気株式会社	野村久七郎	取締役(43年)	M43.1	500,000
鎮西倉庫株式会社	吉田又吉	監査役(34～35年)	M33.5	100,000
鎮西倉庫株式会社	児島善次郎	監査役(37～45年)		
博多魚市株式会社	石蔵利平	専務取締役(30～ 33年)、取締役(34 ～35年)	M25.9	25,000
博多瓦斯株式会社	野村久七郎	監査役(42～44年)	M37.10	250,000
博多瓦斯株式会社	三苫寛一郎	取締役(42～45年)		
博多汽船株式会社	吉田又壽	取締役(36年)	M30.9	※55,466
博多汽船株式会社	吉田又吉	取締役(31～35年)		

表22

会 社 名	人 名	役 職	創立年月	資本金
博多絹綿紡績株式会社	奥 村 利 助	取締役兼支配人 (30年)、監査役(31 年)、常務取締役 (32年)、取締役(33 ~35年)	M29. 1	600,000
博多絹綿紡績株式会社	藤 井 五 平	監査役(31~33年)		
博多競商株式会社	野 村 久 七 郎	取締役(31、34~40、 43~45年)常務取 締役(41~42年)	M30.10	※3,750
博多競商株式会社	松村半右衛門	取締役(36~45年)		
博多競商株式会社	宮 崎 藤 七	取締役(31~35年)		
博多競商株式会社	小 川 小 三 次	取締役(32~33年)		
博多競商株式会社	具 島 勘 右 衛 門	監査役(31~33年)		
博多競商株式会社	篠 原 由 次 郎	監査役(34~35、37 ~43年)		
博多競商株式会社	中 尾 卯 兵 衛	取締役(33年)		
博多競商株式会社	中 牟 田 喜 兵 衛	監査役(31~32年)		
博多競商株式会社	百 田 源 七	取締役兼支配人 (31~32年)、取締 役(33年)、社長(34 ~36年)		
博多競商株式会社	吉 田 又 吉	社長(31~32年)		
博多競商株式会社	伊 藤 長 兵 衛	監査役(33年)		
博多製陶株式会社	吉 田 又 壽	取締役(42~43年)	M29.12	
博多通送株式会社	三 苦 寛 一 郎	社長(44~45年)	M43. 9	100,000
博多通送株式会社	具 島 勘 右 衛 門	監査役(44~45年)		
博多通送株式会社	篠 原 由 次 郎	監査役(44~45年)		
博多通送株式会社	野 村 久 七 郎	取締役(44~45年)		
博多電気軌道株式会社	渡 辺 与 八 郎	取締役(44年)	M44.10	1,500,000
博多電燈株式会社	吉 田 又 吉	監査役(30~31年)	M29. 3	50,000
博多土居銀行	石 蔵 利 平	取締役(31~35年)	M30. 4	50,000

表22

会社名	人名	役職	創立年月	資本金
福岡築港株式会社	中 牟田 藤 兵 衛	監査役(40年)	M33. 8	120,000
福岡貯蓄銀行	吉 田 又 吉	取締役(31～32年)	M29. 8	※7,500
福博遠洋漁業株式会社	三 苫 寛 一 郎	取締役(45年)	M44. 5	1,000,000
福博電気軌道株式会社	三 苫 寛 一 郎	監査役(44年)	M42. 9	600,000
丸三合名会社	三 苫 寛 一 郎	代表社員(34～37年)	M34. 2	30,000
八幡電燈株式会社	三 苫 寛 一 郎	取締役(43年)	M43. 1	50,000
吉田合名会社	吉 田 忠 兵 衛	代表社員(38年)	M37. 5	60,000
冷泉汽船株式会社	児 島 善 次 郎	監査役(35～38年)	M34. 9	3,200
冷泉汽船株式会社	門 司 儀 壯	取締役(41～43,45年)		
冷泉汽船株式会社	吉 田 又 壽	取締役(36～37年)		
若松築港株式会社	野 村 久 一 郎	取締役(27～28年)	M25. 7	300,000

備考：表中の※は払込資本金額を示す。

出典：表21；『福岡県統計書』（各年次）；西日本文化協会編纂『福岡県史』通史編近代産業経済（二）、福岡県、2000年；各社『社史』等による。

## むすびにかえて

地域経済における地方商工業者の役割は必ずしも消極的とは言えないであろう。むしろ会社設立時には役員や株所有という形でそれを支えたといえる。本稿で考察してきたように、彼等は地域経済の発展に積極的に関与していた。ここでは呉服商を中心として考察したが、協成組にみられたような地域の活性化を始めとし、商業関係では正札販売の徹底や商業会議所の設立に大きく寄与している。会社設立に関してもその発起人や発起株の引受を行い役員に就任する等、会社設立に大きく寄与しているのである。そこでみられた呉服商人（あるいは一族）はすでに前時代から町における有力者であり、蓄積もある一定の水準を保っていたと考えられる。また、営業税、所得税額の順位でみたように、上位に位置する呉服商は若干の変動はあるものの、営業状況も比較的安定していたといえるだろう。

また、河内卯兵衛のように「博多の虫」として地域のために活動する商人もみられた。

しかし、かれらの大部分は本業を持つとはいえ営業が多種にわたり、かつ、商人間の金銭的な貸借関係などが複雑に絡み、景気循環の状況によってはその根底が崩れるという脆さを持っていた。また、企業の合併や出資の構成変化はそれまでの商人の契約や取引関係を変える危険性をもっており、その意味では常に厳しい状況におかれていたと言ってよい。

また、そのことが、彼らの企業者活動に影響を与えていることも否定できないであろう。そして、地域の経済的發展や社会的發展が地方—中央の関係へと拡大していくことにより、地方商工業者の対応が困難になってきたと思われる。松永安左衛門が事業計画の相談を受けた時、次のような事を言ったというが、如実にそのことを示している。少々長くなるが見ておく。

「私（松永安左衛門—引用者）は其の人に東京の実業家の賛成を得る事の必要を説いた、其れは単に資金吸入許りではない。総てに於いて中央の人士が一步進んで居るからだ、此れは資本と人物の輸入とも云へる、時勢の変動は中央の人士が早く知る機会がある従って損得も早く知る事が出来る…」<sup>(90)</sup>

さらに、ここでは検討できなかったが、「家」制度や「暖簾」の重みが商人の企業活動にどのような影響を与えたのか、を再度考える必要があるであろう<sup>(91)</sup>。

呉服商の發展ということで見るならば、明治期には有力な呉服商が存在したにも関わらず、後に百貨店へと發展を遂げ成功するのは岩田屋のみであり、その岩田屋も、北部九州を中心に百貨店を展開する佐賀の田中丸家経営の玉屋に先を越されている<sup>(92)</sup>。この事実は単に経営者のビジネスチャンスの捉え方だけでなく、イエ制度や同族におけるリーダーシップの問題、地域の経済發展のあり方も影響しているのではないだろうか。

もちろん、呉服太物業者がすべてにおいてその中心となったわけではない。商工業發展のためにはすべての者が協力する必要があるのである。そのためには、呉服以外の商人の検討も当然行わなければならない。そして、彼等

がその後どのような方向性を見いだしていくのかは今後の課題としたい。

なお、本稿執筆にあたり、岡本幸雄先生（西南学院大学名誉教授）には『渡辺文書』やイエ制度等に関し貴重なアドバイスを賜った。深く謝意の意を表します。

(注)

- (1) 岡本幸雄『地方紡績企業の成立と展開』九州大学出版会、1993年；東定宣昌「明治中期九州地方の電気業—電灯会社・水電会社の設立過程を中心として—」九州大学『経済学研究』第41巻第1号、1975年；末永國紀『近代近江商人経営史論』有斐閣、1997年；永江眞夫「明治中後期における地方都市商工業者と企業経営—福岡市における概観—」福岡大学『経済学論叢』第42巻第4号、1998年；加藤要一「明治中後期福岡県における会社設立状況」九州産業大学『エコノミクス』第5巻第2号、2000年；同「明治中後期福岡県における企業家集団」九州産業大学『エコノミクス』第5巻第4号、2001年；迎由理男「近代博多商人の企業活動」北九州大学『商経論集』第37巻第1号、2001年。
- (2) 末永國紀、前掲書、206、211ページ。
- (3) 永江眞夫、前掲論文、32ページ。
- (4) 迎由理男、前掲論文、100～101ページ。
- (5) 同上、101～105ページ。
- (6) 明治期の呉服太物商の位置づけについては永江、前掲論文において分析されている。永江によれば、明治中後期における福岡市の呉服太物業者の位置づけについては営業税額、所得税額からして呉服太物業者の地位はトップにあり、福・博の商工業者を代表するのは呉服太物業者であると指摘している（永江眞夫、前掲論文参照）。また、福岡を対象としたものではないが、呉服商の経営について賀川隆之「関東呉服問屋奈良屋の経営」『三井文庫論叢』第35号、三井文庫、2000年や樋口知子「関東呉服商人名前—杉浦家『東武店万用集』を中心に—」『三井文庫論叢』第33号、三井文庫、1999年の史料等がある。
- なお、本稿で扱う呉服太物商には専門職業としての呉服商のみでなく、兼業として呉服を取り扱っている商人も含む。利用する資料で、同じ商人が年度によっては木綿商、洋服商、古着商等に分類されており、職業を断定するのに困難な場合もみられるからである。したがって、本文で触れる呉服太物商は、その時点で利用した資料に「呉服太物商」、「呉服反物商」、「呉服商」等と記載されている商人を指している。
- (7) 株式会社岩田屋二十年史編纂委員『株式会社岩田屋二十年史』株式会社岩田屋、1961年、10ページ。
- (8) 「店運上帳」（1866年）宮本又次編『九州経済史論集』第3巻、福岡商工会議所、1958年所収。但し、同史料は1871年頃までの内容が記載されているようであるが、詳細に

については同書の解説を参照。

- (9) 秀村選三「慶応2年店運上帳解説」宮本又次編、前掲書、251ページ。
- (10) 山崎藤四郎『石城遺聞』三養堂、1890年（名著出版、復刻版）、1973年、115ページ。
- (11) 同上書、117ページ。
- (12) 迎由理男、前掲論文、84ページ。
- (13) 山崎藤四郎、前掲書、117～121ページより。
- (14) 迎、前掲論文、83ページ。

近世博多について、喜多恵は洲崎町上における商人の変遷を考察している。喜多の研究によれば、福岡藩は城下町福岡の振興政策から、福岡での呉服店経営を奨励し、博多での呉服経営権を奪う政策をとった。そのため博多では呉服店の経営は1740（元文5）年3月から営業を停止させられることになったが、その政策は失敗し、1746（延享3）年には博多での呉服営業は許されることになった。しかし、その後も呉服店の経営は規制されることが多く、藩のこのような政策に翻弄され、和泉屋のように経営破綻する商人もみられたという（喜多恵「近世博多洲崎町上の経済的・地理的特性についての一考察」福岡大学『大学院論集』第17巻第2号、1985年、105ページ）。

この藩の規制がいつ頃まで続けられたかは分からないが、一時的にせよ藩のこのような政策は呉服業者の交代をもたらす一つの要因になると考えられる。

- (15) 前掲『株式会社岩田屋二十年史』、36ページ。
- (16) なお、同上『株式会社岩田屋二十年史』にも同様の資料が掲載されているが、同書では斧屋久七郎は斧屋又七郎、紙与本店は紙屋東店、奥村次八は奥村治八となっている（同書、37～38ページ）。
- (17) ただし、すでに触れたように『店運上帳』は福岡部が含まれていないため、若干の人数上の違いがでてくるかもしれないが、それほど多くはないと思われる。
- (18) 前掲『株式会社岩田屋二十年史』、52ページ、55ページの年表による。
- (19) 川崎源太郎『筑紫国名所豪商案内記』龍泉堂、1885年による。
- (20) 安永要蔵・井ノ口金太郎編輯兼発行『福岡県内豪家一覧表』1887年（福岡県立図書館蔵）。
- (21) 同資料を利用したものとしては、前掲『渡邊與八郎伝』で渡邊家が関連する一部分が掲載されている。表3のリストは福岡部、博多部の商工業者について職業が確認できるものを基本に、有力な同族と思われる者も取り上げ、若干他の資料で補っている。
- (22) 岡部啓五郎『九州鉄道旅客便覧』1893年。
- (23) 一族はここでは屋号が同じものや氏名で判断しリストアップしている。
- (24) 1896（明治29）年の広告では吉田又吉は綱場町に呉服の本店、支店、和小間物東支店で営業となっており、渡辺与三郎は下西町に洋反物支店を開店し（『福岡日日』1896年1月1日）、1898年5月には行町に呉服の支店を開設した。

小田部博美『博多風土記』によればこれらの商人は実に多彩な動きをみせていることが分かる。同書によりながら、そのいくつかの店舗展開を見ておこう。

○13代の石蔵利平は「米商会」創設当時の副頭取で1895（明治27）年4月9日病没。

○三吉朝次郎が明治19年に綱場町で呉服反物を開業（父は寛三郎）し、1898（明治31）



年、弟の寛一郎と共同で合名会社丸三呉服店を設立し麹屋町へ転居。朝次郎が1904（明治37）年7月病没したため寛一郎の単独経営となる。

- 紙小こと小川小七についてであるが、元々小川家は小八と小平の萬小間物と銅鉄金物船釘卸店であった。小七の時代に支店であった呉服反物が主流となり、第一商店（小間物）第二商店（洋品小間物）第三商店（呉服和洋反物）第四商店（文房具卸）第五商店（金物）第六商店（呉服反物）と手を広げた。
  - 大工町の岩田屋呉服店から分家した岩田屋が掛町に進出、さらに中牟田久兵衛も毛織物店を同町に開店。
  - 九十呉服店（篠原由次郎）は明治末期に綱場町から掛町に移り、由次郎が倒れると、下土居町の同族亀次郎が跡を継ぐ。
  - 吉田又吉は晩年は又壽と称した。又吉は1884（明治17年）頃に博多、久留米間に馬車会社を創設、さらに日清戦争の頃にスチームボートを経営し今宿、西戸崎、志賀島、宮ノ浦間の巡航船を個人経営で日露戦争頃まで続けていたが、博多冷泉汽船会社に譲渡した。
  - 笠野屋五平（藤井五平）は呉服町で呉服商となり、のち石堂町に移転して病没。三代目伍兵衛は綱場町に移転。1909（明治42）年には店を三階建て西洋風に改装。1913（大正2）年には福博興業貯金会社を創立。
  - 野村一族では斧屋（野村）久八（呉服）、久七郎（呉服）、久作（船問屋、旅人宿、代呂物）、久次（古手屋、質物、大賀次の階級）、友左衛門（古手屋、質屋）、貞平（瀬戸物）、次平（焼物）、佐助（荒物小間物）、久一郎（呉服）、久右衛門（古着屋）、久蔵（古着屋）、久七郎（呉服反物卸）、久吉（呉服反物小売）等の営業がみられる〔以上、小田部博美『博多風土記』海鳥社、1969年、336～726ページによる〕。
- (25) 『分家譲渡帳』1878（明治11）年中の「譲渡傳書」による（『渡辺文書』、福岡市総合図書館寄託資料、マイクロフィルムによる）。後に、この醤油造は娘婿の勘次郎に譲っている。
- なお、本文で利用する『渡辺文書』はすべて同館所蔵のものを利用した。
- (26) 『福岡日々』1896年2月19日。
  - (27) 同上紙、同月日。
  - (28) 『福岡日日』1895年1月1日。
  - (29) 同上紙、同年月日。
  - (30) 迎、前掲論文、第6表（82ページ）参照。なお、同表では呉服では野村久吉、久一郎、甚助といった名前が見あたらないが、引用資料には野村久兵衛（540円）、野村久左衛門（3,000円）、野村久八（590円）等が見られる。
  - (31) 隈部紫明、柴崎直『福岡市人物大鑑』福岡出版協会、1936年、85～86ページ。
  - (32) いつ頃から親族となったかは不明であるが、1901（明治34年）に渡辺勘次郎の新築落成式の出席名簿では吉田又（壽）吉は親族として出席をしている「客来帳」（『渡辺文書』）。
  - (33) ただし、30円以下の者でも、「工業化にして其技術の巧なるもの又は商業家にして前途有望のもの」はその正確性を調査し、掲載している。この点については同書の凡例

を参照。

- (34) 渡辺家の活動については橋詰武生、前掲書を参照。
- (35) 前掲「譲渡傳書」による。
- (36) 「譲受証」(渡辺勤次郎、渡辺与三郎宛)〔『渡辺文書』〕。
- (37) 「日記」(1906年4月25日、同6月12日)〔『河内文書』、福岡県立図書館寄託資料〕。以下、『日記』は同館所蔵のものである。
- (38) 橋詰武成、前掲書、73～76ページ。
- (39) 永野民次郎『大福岡今昔人物誌』大福岡発展研究会、1953年、147ページ。
- (40) 以下『日記』による。
- (41) 1904(明治37)年5月3日にも同様の内容の記録が見られるが、これは1901年の内容と同じでこの時には、大阪債権者が百田閉店を議決したが、卯兵衛は「百田発行の百三十銀行、吉田忠次郎等宛の約束手形に裏書せるもの多額に上り、若し百田万一の場合は忽ち我の一大困難となるべく、又折角の百田を潰すは最も忍びさる処なれば、百方奔走尽力の末」解決したと記されている(『日記』1904年5月3日)。また、このことにより「間接の責任は変して直接の責任となり、思はざる困難を忍ばざるべからざるに至」った(同年同月日)。
- (42) 永野民次郎、前掲書、1953年、146ページ。
- (43) 残念ながら、いかなる内容のものであったのかは確認しえない。なお、貝島家の家憲については畠山秀樹「貝島家の家憲」大分大学『経済論集』第37巻第1号、1985年；麻生家の家法については同「筑豊麻生家の家法」大分大学『経済論集』第36巻第6号、1985年を参照。
- (44) 「貝島会社年表草案」『石炭研究資料叢書』第10輯、九州大学石炭研究資料センター、1989年、86ページ。ただし、その安川も大正、昭和に「家憲とも称すべき資産取扱法」及び「家政の確定」を行い同家の活動を規定している(この点については拙稿「安川・松本財閥における鉄鋼業経営について」第一経済大学『第一経大論集』第29巻第2号、1999年を参照)。
- (45) 『日記』(前掲『河内文書』、1892年8月22日、1897年1月25日など)。
- (46) 営業税、所得税については堀口和也「営業税創設の沿革と意義—直接税制度の発展に果たした役割—」関東学園大学『経済学紀要』第26集第1号、1999年；大蔵省『明治大正財政史』第7巻(内国税・下)、1938年等を参照。なお、「営業税」のデータを基に明治大正期における物品販売業の展開を分析したものに松本貴典「明治大正期の日本における物品販売業の全国展開—営業税データによる数量的接近—」安藤精一・藤田貞一郎編『市場と経営の歴史』清文堂、1996年がある。
- (47) 迎由理男、前掲論文、85～100ページ。
- (48) 笹渕勇編『福岡商工会議所百年史』福岡商工会議所、1982年、28ページ。
- (49) 以下、議員については同上書に収録されている「歴代役員・議員名簿」による。
- (50) 『日記』1902年10月2日。
- (51) 以上の内容は『福岡日日』1902年11月21日、11月25日による。
- (52) 『日記』1904年12月14日。なお、1902年の商業会議所改変の時も太田清蔵、渡辺与三

- 郎らと河内卯兵衛は話し合っている（『日記』1902年10月2日）。
- (53) 同上、1904年12月14日、1905年1月10日、2月14日。
- (54) 『福岡日日』1896年1月28日
- (55) 同上、同年月日。協成組は、1883（明治16）年12月から業務を開始した私設博多灯台の徴収する高額な入港税に対して荷主が減額運動を行い、渡辺与八郎ら120人が団結し入港税の引き下げに成功し、荷主らは翌84年に「協成組」を結成するに至ったものである（詳細は前掲『福岡商工会議所百年史』、36～38ページ、50～51ページを参照）。なお、『福岡日日』1896年1月28日には「共成組」と記載されている。
- (56) 「協成組創立ノ要旨」『福岡日日』1884年7月12日。
- (57) 同上紙、同月同日。なお、「コト」は原文のまま「門」としている。
- (58) 同上紙、1884年12月17日。
- (59) 前掲『福岡商工会議所百年史』、50～51ページ。
- (60) 『福岡日日』1884年12月17日。
- (61) 前掲、『福岡商工会議所百年史』、51ページ
- (62) 同上、69～71ページ
- (63) 『福岡日日』1896年1月26日。
- (64) 博多絹綿紡績会社については岡本幸雄『地方紡績企業の成立と展開—明治期九州地方紡績の経営史研究—』九州大学出版会、1993年を参照。また、西日本文化協会編『福岡県史 近代史料編 綿糸紡績業』福岡県、1985年に同社に関する関係史料が収録されている（同書、第4編、第5編参照）。
- (65) 『博多絹綿紡績株式会社株主総会関係書類』（『渡辺文書』）。
- (66) 岡本幸雄、前掲書、252～257ページ。なお、発起株引受数は同書、同箇所の「博多絹綿紡績会社株主表（上位40名）」による。また、『福岡日日』1896年1月12日では発起株引受人の氏名が異なる。
- (67) 『博多絹綿紡績株式会社第一回報告』（明治廿九年上半期）（『渡辺文書』）
- (68) 以下、「日記」（『河内文書』による）。
- (69) 同上、『日記』1903年2月5日、4月4日、同7年1月10日。
- (70) 同上、1906年1月2日。
- (71) 同上、1906年12月16日。
- (72) 迎は渡辺与一が企業活動に消極的になった理由の一つに博多絹綿紡績会社の失敗をあげている（迎、前掲論文、104ページ）。
- (73) 「博多貿易商会と遠洋漁業」『九州日報』1911年3月28日。
- (74) 同上紙、同月日。
- (75) 由井常彦・浅野俊光編『日本全国諸会社役員録』（16）柏書房、1989年、492～493ページ。
- (76) 同上書、498ページ及び『九州日報』1911年3月28日。
- (77) 各年度「株主名簿」博多遠洋漁業株式会社（『河内文書』）による。
- (78) 「第四回報告」自明治四十五年七月一日至大正元年十二月三十一日（『河内文書』）。
- (79) 由井常彦・浅野俊光編、前掲書15。

- (80) 『第五回營業報告書』大正元年下半年期（『河内文書』）。
- (81) 同上資料。また、呉服商ではないが、渡辺コトが新旧合計75株、渡辺龍二郎が27株がみられる。
- (82) 「第四回營業報告書」自大正二年八月一日至大正三年一月卅一日（『河内文書』）。
- (83) 「第九回營業報告書」（『河内資料』）による。
- (84) 「株主名簿」同上による。
- (85) 『福岡市史』第1巻明治編、福岡市役所、1959年、740～741ページ。
- (86) 「博多通運株式会社株式申込ノ件」1910年8月、博多通送株式会社（『渡辺文書』）。なお、博多・吉塚両取引店の権利買収金は4,000円である。
- また、同社の社名は最初博多通運株式会社とされていたようであり、後に博多通送株式会社と名称変更されたようである。すなわち、同社創立委員長の三苫寛一郎から渡辺勘次郎宛の株金払込依頼書には「博多通運株式会社株式御申込…第一回払込金額減少並名称変更ノ義別紙ヲ以テ申上置候間…」とあることから、名称変更は社名の変更と思われる。
- (87) 『九州日報』1911年1月1日。
- (88) 『福岡県統計書』、前掲『日本全国諸会社役員録』による。
- (89) 博多商人のタイプについては迎、前掲論文を参照。
- (90) 「福岡市と事業家」『福岡日日』1915年9月5日。
- (91) その他、さらに商工業者同士の結びつきがどのようになっているのかも重要であろう。例えば、渡辺与三郎の死後、会社設立ではないが、渡辺綱三郎は堰を切ったように役員に就任している。

綱三郎を組み入れて整理したものが下記の表である。

同表から、吉田一野村一三苫一渡辺のラインを読み取ることにはできないであろうか。表中にある本人とではないが、河内卯兵衛の『日記』には太田清蔵、太田勘太郎、渡辺伊助や吉田呉服店、野村久次等と懇意にしているような記述がみられる。ここに、河内を仲介とするようなグループが存在していたのではないかと推測することも可能であろう。

- (92) 田中丸家の百貨店形成過程については拙稿「地方百貨店成立前史～(株)玉屋を例にして～」『第一經大論集』第31巻第2号、2001年を参照。

#### 渡辺綱三郎の役員就任状況

渡 辺 綱 三 郎	鎮西倉庫株式会社	取締役（34～40年）
渡 辺 綱 三 郎	博多瓦斯株式会社	取締役（41～45年）
渡 辺 綱 三 郎	株式会社博多冷蔵庫	取締役（42～45年）
渡 辺 綱 三 郎	福博電気軌道株式会社	取締役（44年）
渡 辺 綱 三 郎	博多通送株式会社	取締役（44～45年）
渡 辺 綱 三 郎	八幡電燈株式会社	監査役（43年）

渡辺綱三郎	株式会社博多貿易商会	取締役 (45年)
渡辺綱三郎	博多電燈軌道株式会社	取締役 (45年)
渡辺綱三郎	福博速洋漁業	取締役 (45年)
渡辺与八郎	博多電気軌道株式会社	取締役 (44年)

出典：表21と同じ。

渡辺綱三郎を組み入れて整理したものが下記の表である。

会社名	人名	役職
石蔵酒造株式会社	石蔵利平	取締役 (36年)
株式会社石蔵商店	石蔵利平	取締役 (36～45年)
株式会社久留米米穀取引所	児島善次郎	理事 (30年)
株式会社博多米穀取引所	児島善次郎	監査役 (31～34年)
株式会社博多米穀取引所	野村久一郎	理事長 (27～30年)
株式会社博多米穀取引所	吉田又吉	監査役 (27～30年)
株式会社博多貿易商会	三苦寛一郎	取締役 (45年)
株式会社博多貿易商会	渡辺綱三郎	取締役 (45年)
株式会社博多冷蔵庫	渡辺綱三郎	取締役 (42～45年)
株式会社博多冷蔵庫	三苦寛一郎	取締役 (42～45年)
株式会社萬蔵館	吉田又吉	取締役 (31年)
株式会社萬蔵館	百田源七	取締役 (30～34年)、社長 (35年)
北野銀行	野村甚助	監査役 (38～45年)
九州生命保険株式会社	中尾卯兵衛	取締役 (28～29年)
十七銀行	中尾卯兵衛	取締役 (26～29年)
太宰府製糸株式会社	小川小三次	取締役 (30～32年)
筑紫銀行	奥村利助	取締役 (26～29年)
筑紫銀行	野村久一郎	副頭取 (26～27年)
筑紫銀行	藤井五平	取締役 (26～29年)
筑紫銀行	吉田又吉	取締役 (26～29年)
筑紫水力電気株式会社	野村久七郎	取締役 (43年)
鎮西倉庫株式会社	吉田又吉	監査役 (34～35年)
鎮西倉庫株式会社	渡辺綱三郎	取締役 (34～40年)

会社名	人名	役職
鎮西倉庫株式会社	児島善次郎	監査役(37~45年)
博多魚市株式会社	石蔵利平	専務取締役(30~33年)、取締役(34~35年)
博多瓦斯株式会社	渡辺綱三郎	取締役(41~45年)
博多瓦斯株式会社	野村久七郎	監査役(42~44年)
博多瓦斯株式会社	三苫寛一郎	取締役(42~45年)
博多汽船株式会社	吉田又壽	取締役(36年)
博多汽船株式会社	吉田又吉	取締役(31~35年)
博多絹綿紡績株式会社	奥村利助	取締役兼支配人(30年)、監査役(31年)、 常務取締役(32年)、取締役(33~35年)
博多絹綿紡績株式会社	藤井五平	監査役(31~33年)
博多競商株式会社	野村久七郎	取締役(31、34~40、43~45年) 常務 取締役(41~42年)
博多競商株式会社	松村半右衛門	取締役(36~45年)
博多競商株式会社	宮崎藤七	取締役(31~35年)
博多競商株式会社	小川小三次	取締役(32~33年)
博多競商株式会社	具島勘右衛門	監査役(31~33年)
博多競商株式会社	篠原由次郎	監査役(34~35、37~43年)
博多競商株式会社	中尾卯兵衛	取締役(33年)
博多競商株式会社	中牟田喜兵衛	監査役(31~32年)
博多競商株式会社	百田源七	取締役兼支配人(31~32年)、取締役 (33年)、社長(34~36年)
博多競商株式会社	吉田又吉	社長(31~32年)
博多競商株式会社	伊藤長兵衛	監査役(33年)
博多製陶株式会社	吉田又壽	取締役(42~43年)
博多通送株式会社	三苫寛一郎	社長(44~45年)
博多通送株式会社	具島勘右衛門	監査役(44~45年)
博多通送株式会社	篠原由次郎	監査役(44~45年)
博多通送株式会社	野村久七郎	取締役(44~45年)
博多通送株式会社	渡辺綱三郎	取締役(M44~45)

会社名	人名	役職
博多電気軌道株式会社	渡辺与八郎	取締役 (44年)
博多電燈軌道株式会社	渡辺綱三郎	取締役 (45年)
博多電燈株式会社	吉田又吉	監査役 (30～31年)
博多土居銀行	石蔵利平	取締役 (31～35年)
福岡築港株式会社	中牟田藤兵衛	監査役 (40年)
福岡貯蓄銀行	吉田又吉	取締役 (31～32年)
福博遠洋漁業株式会社	渡辺綱三郎	取締役 (45年)
福博遠洋漁業株式会社	三苫寛一郎	取締役 (45年)
福博電気軌道株式会社	渡辺綱三郎	取締役 (44年)
福博電気軌道株式会社	三苫寛一郎	監査役 (44年)
丸三合名会社	三苫寛一郎	代表社員 (34～37年)
八幡電燈株式会社	三苫寛一郎	取締役 (43年)
八幡電燈株式会社	渡辺綱三郎	監査役 (43年)
冷泉汽船株式会社	児島善次郎	監査役 (35～38年)
冷泉汽船株式会社	門司儀壯	取締役 (41～43、45年)
冷泉汽船株式会社	吉田又壽	取締役 (36～37年)
若松築港株式会社	野村久一郎	取締役 (27～28年)

出典：表21と同じ。